

パワフルプロ野球 僕らのマイライフ

IMO&IMO

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺の名前は杉村亮。幼いころから野球が好きで白球ばかり追いかけていた。今日は、俺はパワフル高校に入学した。

俺の高校野球人生が始まる。

野球大好き少年の主人公杉村亮が高校野球で友人や幼馴染みと甲子園を目指してプロ野球選手を目指す物語。そこで先輩やライバルとの出会いが主人公にどのような影響を及ぼすか

主人公の青春はいかに。

オリジナルの後輩、女子マネ、そしてライバルも登場。

ps

プロ野球編まで書くつもりなので末永くよろしくお願いします。
初連載なのでアドバイスや感想を是非ください。

目次

高校野球編 1年

野球部入部	1
ライバルとの出会い	5
練習試合	11
レギュラー発表	16
夏予選 あかつきの実力	18
夏予選 パワフル高校対そよ風高校	20
先輩の思いで	25
出会いと喫茶店	29
西満涙寺と野球少女	37
夏合宿①	41
夏合宿②	46
夏合宿③	49
夏合宿④	52
夏合宿⑤	56
夏合宿⑥	59
夏合宿⑦	62
夏合宿⑧	66
夏合宿⑨	70
友情タッグと約束	73
デート① 栗原舞編	76
藤咲バッテリーングセンター	80

高校野球編 1年 野球部入部

俺の名前は杉村亮。今日からパワフル高校に入学する15歳。

これから始まる俺の高校生活は充実できるのか心配だ。しかし俺には夢がある。それは、野球部に入部して甲子園に出場してプロ野球に入団して活躍することだ。これから一体どんなことが待ち受けているのか？

入学式

杉村「えーと、1ーFはどこかな…あつたここが俺のクラスか。どんな奴がいるのかな？」ガラァ ワーワー

杉村「うわー。知り合い誰もいないのか。俺これからやっていけるかな…とにかく席に座ろう。」テクテク

???「君も1人なんでやんすか？」

突然変なメガネをかけた男に声をかけられてしまった。

杉村「そうだけど。君もかい？」

???「そうでやんすよ。おいらの名前は矢部明雄でやんす。どうかよろしくでやんす。」杉村「俺は杉村。こちらこそよろしくね。矢部くん。」

矢部「こちらこそでやんす。ところで杉村君は部活とかなにか決めてるんでやんすか？」杉村「もちろん。俺は野球部に入部するよ。そうだ矢部くん。君も一緒にやらないかい？」矢部「でも、おいら入りたいところが…。」杉村「一緒に甲子園目指そうよ。それにホラモテるよ。」

矢部「仕方ないでやんすね。一緒に甲子園目指すでやんすよ。」
(矢部くんってモてなさそうだな)

こうして俺らは2人とも野球部に入部することになった。

ガヤガヤ

監督? 「えー。新入生始めましめ。パワフル高校の監督の大波だ。今年も甲子園を目指している。しっかりついてこい。俺からは以上。

次にキャプテンから。」

キャプテン「キャプテンの石原です。これからは君たちも野球部の1人だ。はやくなれて戦力になれるよう頑張ってくれ。ということだからノックを受けてもらう。各自アップをするように。」

矢部「おいらここでアピールして夏からレギュラーになるでやんす。」

???「おい、そのメガネ高校野球なめんなよ。よし。お前だけは特別に厳しいのにしてやろうか。」

矢部「ヒィ〜。おいらやつぱり無理かもしれないでやんす。」

石原「こらこら。今から諦めてどうするんだ。」

杉村「キャプテン。あのさっきの人は誰なんですか?」

石原「あいつは尾崎。うちの2年生レギュラーだ。まあ、口は悪いけど優しいやつだから頼れがいのある先輩だと思うよ。相談とかしてみればいいよ。ほら、お前らもアップが終わったらさっさと尾崎のノックを受けてこい。」

杉村・矢部「ハイ!」

その後俺らは尾崎先輩によって早々高校野球の洗練を受けた。

そして矢部くんのみ倍の数を受けた。

野球部に入部して1週間がとうとした。俺ら1年はあのノックいこう球拾いがメインだった。はやくボールにまともな練習がしたいなと思っていた時監督とキャプテンの会話が聞こえた。

石原「監督。1年にもそろそろ高校野球のレベルというのをきちんと思せたほうがいいと思うで次の土曜日にも他校の練習を見学にでも連れて行っていいでしょうか?」

大波「確かに。なら、あかつきなんてどうだ。トップの方を見せたほうがいいだろうしな。それにお前らもなにか練習のコツなど盗めるかもしれないしな。あかつきには俺から連絡しておくから日付が決まり次第教えるからそれまでは普通通りな。」

まじかー!!?あのあかつきの練習が見学できるなんてラッキー。

俺がなんでこんなに興奮してるのかって?

俺はもともとあかつきで野球がしたかったんだよ。あかつきはあかつき大付属高校のことでここ最近甲子園常連校だ。俺の憧れだ。しかし、俺は見事に落ちた。だからあかつきの練習が見学できるのは非常に嬉しいのだ。

今日はそのことしか頭になかったため大事な人が野球部に入部していたことにも気がつかなかった。練習が終わるまで…

その日の放課後

大波「全員集合したな。実は何人かは気がついてるかもしれないがマネージャーが今日から入部した。今から自己紹介をしてもらう。」

矢部「舞ちゃん可愛いでやんすね。」

杉村「えっ、矢部くん今なんて言ったの」

矢部「だから『舞ちゃん可愛い』って言ったでやんすよ。」
舞ちゃんだって

舞「今日から入部した栗原舞です。皆さんよろしくお願いします。」
パチパチ

人違いなんかじゃない。あの舞ちゃんだ。若干変わってるけど昔の面影がある。

矢部「杉村君、舞ちゃんのこと知ってるんでやんすか？」

杉村「まあ。幼なじみというやつ。小学生以来なんだけどね。にしても本当に可愛いね。」

まあ可愛いくてとうぜんだと思うけどね。なんたって小さい時から舞ちゃんは可愛いかった。小さいときはよく日が暮れるまで遊んでいたこともよくあった。とても幸せな日だった。そして俺の初恋の相手でもある。

しかし、小学3年の時に突然舞ちゃんが転校した。それ以来連絡なんて1度もとっていないだけにびっくりもしたし、嬉しかった。

そして帰り道の途中

矢部「杉村君。土曜日が楽しみでやんすね。あの天下のあかつきの練習が見れるでやんすよ。それに舞ちゃんも女子マネとして入部してきておいらかなり嬉しいでやんす。」

杉村「そうだね。本当にあかつきの練習が見学できるとか俺も楽しみなんだよね。でも、それより舞ちゃん可愛くなつたよね。昔から可愛かったけど。」矢部「また始まつたでやんす。おいら今日商店街に用事があるからここでバイバイでやんす。」杉村「わかった。じゃあね。また明日。」テクテク。

杉村「舞ちゃんって今どこに住んでるのかな？昔と同じところだったら挨拶ぐらいしたいな〜」

???'「誰に挨拶したいのかな？」

えっ、もしかしてさつきから誰かついてきてたの!!?でもこの声なんか聞き覚えのある声だな。俺は声がした方向に顔だけ向けてそいつをみた。そこにいたのはまさに幼なじみの舞ちゃんだった。彼女は買い物帰りなのか両手に買い物袋を抱えてた。

栗原「久しぶり。亮君。元気にしてた？」

杉村「もちろん元気だったよ。舞ちゃんこそ元気にしてた？」

栗原「うん。こんなところで会うなんて偶然だね。今もこの近くに住んでんの？」

杉村「舞ちゃん気がついてないの？俺、パワフル高校だよ。それも野球部。」

栗原「嘘。気がつかなかつたよ。亮君、本当に野球好きなんだね。ということは今もここから少し入ったところの河川敷の近くに住んでる？」

杉村「まあ引越しかしてないからね。舞ちゃんは？」

栗原「私？私も実は今度の家はそこらへんなんだよね。」

杉村「へえ〜。そうなんだ。近いね。なら一緒に帰ろうか。」
こうして俺と舞ちゃんは再開した。

ライバルとの出会い

4月中旬のある土曜日。ついに今日はあかつきの練習を見学する日になったが・・・俺は今迷子になってしまっている。時間は6時ごろだろうか。なぜ迷ってしまったか。時間をさかのぼること1時間前。

俺はあまりにも興奮してしまって5時前に目が覚めてしまった。今日は9時にパワフル高校の校門に集合だから二度寝をしようと思っただができなかった。普段は6時ごろに起きて30分程河川敷の周りをランニングをしている。しかし今は5時前だ。完全に目が覚めているため今日はいつもと違うコースでランニングをしようと思いきやジャージに着替えて一階に降りたらずでに親父が起きて新聞を読んでいた。こちらに気が付いたのか親父は俺に話しかけてきた。

親父「おう！亮。今日は早い目覚めだな。今日は雨でも降るんじゃないか。」

杉村「おはよ。ちよいとランニングしてくるから。6時半ごろには戻るからカーさんにも伝えといて。」

親父「へいへい。時間があるからといって知らない道にいつて迷うなよ。」

杉村「15年この町に住んでるんだぞ。迷うはずがなかるうが。行ってくるからね。」

それからいつも通り河川敷までランニングした後には今日はいつもならUターンするところを今日は商店街の方向に行こうと思っただが今日はいつもより1つ手前の路地から入ってみたところ見事に迷ってしまった。そして今に至る。

杉村「やばいな。本当に親父の言った通りに迷ってしまったぞ。この時間は新聞配達も終わってるし仕事や学校行くには早いから人が道に誰もいない。」

河川敷ならランニングしている人やペットの散歩をしている人は多いがここは住宅街だ。運悪くこちら辺には誰もいない。時間も6時を過ぎたところで本格的にあせっていたらマンションからジャージ

姿の三つ編みをした女の子が出てきた。俺はその女の子にすぐ道を尋ねた。

杉村「あの。ごめん。俺、河川敷のほうに行きたいんだけど道に迷ったみたいでさ。行き方教えてくれないかな。」

女の子「えつ。君、河川敷なら次の道を右に曲がったらすぐなんだけど。ちなみに左に曲がったら商店街だよ。もしかして引越してきたばかり？」

杉村「まじで。いや生まれも育ちもこの近くなんだけど。ま、ありがとう。じゃあ。俺はこれで。」

女の子「待つて。僕も今から河川敷のところにランニングするついでだから途中まで一緒に行かない。」

杉村「別にかまわないよ。なら行こうか。」

女の子「うん。」

3分もしないうちに河川敷に戻ってきた俺は見知らぬ女の子に自己紹介をしていないことに気が付いてランニング中に自己紹介をした。

杉村「そういえば。自己紹介をしてなかったな。俺は杉村亮。パワフル高校の1年だ。」

女の子「杉村君なんだね。僕と同年なんだ。僕の名前は早川あおい。恋愛高校の1年だよ。あおいでいいからね。杉村君。」

杉村「OK。あおいちゃん。よろしくね。俺も亮でいいからね。」

あおい「わかったよ。亮君。ところで亮君って部活何しての？」

杉村「俺は野球部だよ。あおいちゃんは？」

あおい「本当に？実は僕も野球部に入ろうと思ってんだ。」

杉村「あれ？でも恋愛って女子校じゃない？」

あおい「今年から共学なんだよ。だから野球ができたらいいなと思ってるんだ。」

杉村「そうなんだ。人数集まればいいね。ここから右に曲がったとこに家があるからまたいつか会おうね。」

あおい「わかったよ。また、一緒に走ろうね。じゃあね」

こうして俺は早川あおいという女の子と出会った。

家に帰りついたのは6時半を過ぎていて親父に迷ったのかとからかわれたがいい出会いがあったからとくに気にもならなかった。

そして、朝食を食べて8時過ぎごろに家を出て歩いて学校にむかった。

俺が付いたところには監督とキャプテンと何人かすでに集まっていた。

大波「よし。1年全員そろったか。」

部員A「監督。矢部がまだ来てません。」

大波「あいつは何をしている。」

矢部「遅くなってすみませんでやんす。」

大波「矢部。次遅れたらグラウンド5週な。」

矢部「ひどいでやんす。」

こうして俺ら1年と監督とキャプテンとなぜか尾崎先輩の10名ちよつとであかつきに歩いて向かった。

あかつきまでは歩いて30分ぐらいで商店街を中心にするると真逆の位置にある。商店街をとおつて、普段ランニングで使ってる河川敷沿いを通つて川の向こう側に赤い橋を利用して通りそこから歩いて5分ぐらいすればあかつき高校につく。

俺らは予定通りに9時半ごろに着いた。今は校門にいる警備員に野球部に連絡をとつてもらっているさいちゆうだ。

それから5分ぐらいたっただろうか。一人の女の子がこちらにやってきた。

澄香「パワフル高校の皆様でしょうか。はじめまして。あかつき高校のマネージャーをしています四条澄香です。」

矢部「はじめましてでやんす。おいらはパワフル高校の黄金ルーキーの矢部でやんす。どうかよろ。」

尾崎「矢部。お前は永遠に補欠になりたくなくなつたらだまれ。」

澄香「グラウンドで監督がお待ちになっております。こちらについてきてください。」

テクテク

『声出せよ』『サード今のとれるよ』『ナイピッチ』

石原「さすがあかつき気合が違うね」

尾崎「しかし、二宮とか主力がいない気がするな」

澄香「ここで少しお待ちください。」

『カキーン』『ビュッ。パーン』

杉村「すげー。レベルが違うよ。」

矢部「さすが全国区レベルでやんす。マネージャーも。そう思わな
いんでやんすか亮君も？」

杉村「・・・矢部君」

あかつき監督「どうもお待たせしました。私があかつきの監督の千
石です。」

大波「どうも私がパワフル高校の監督の大波です。そしてこいつが
キャプテンの石原です。」

千石「いやー。すみませんね。今、一軍はマラソン中でいないんで
すよ。帰ってきたらキャプテンだけでも紹介するんでそれまで2軍
でも見学しといてください。」

パワフル高校1年「2軍！」

杉村「これで2軍なの」

矢部「レベルが高すぎでやんす」

千石「よし。今からフリーバッティングだ。投手は」

・・・「監督。僕が投げます。」

千石「しかし、お前は来週から一軍じゃないか」

・・・「お客さんにもあかつきのレベルを見せるのにちょうどいい
じゃないでしょうか。それとも僕じゃまずいでしょうか。」

千石「わかった。お前が投げろ。」

杉村「あいつ。どこかで見覚えがあるな。」

『ビュッ。ズッバーン！』

尾崎「あいつ誰だよ。他の奴とレベルがけた違いだ。」

思い出したあいつの名前を。中学のところに一度だけ戦って完全試
合をくらったんだ。そうあいつの名前は

矢部「猪狩守君でやんす。中学ナンバー1投手だった。」

尾崎「猪狩だと。あんな化け物までいるのかよ。」

石原「こりや。厳しいな。」

尾崎「1年度も見たか。あれが俺らの目標だ」

パワフル高校の1年（どよくん）

尾崎・石原（やばいな。これ）

その後、俺らはあかつきのレベルのけた違いの差にただ茫然としてた。

午前中練習見学したのちに午後からパワフル高校に戻って練習したのも全く練習にならなかった。

その日の帰り道。

矢部「じゃあねでやんす。亮君」

杉村「じゃあね。矢部君。」

俺はあかつきに行かなくて良かったと改めて思った。力の差が歴然だった。このままじゃ打倒あかつきだなんて夢もまた夢だ。どうすればあかつきに追いつき追い越せるのか考えていた時だった。ドーン。

俺は誰かにぶつかってしまったようだ。

杉村「いてて。あの大丈夫ですか。」

・・・「たく。痛いじゃないか。この華麗な僕の左手を痛めていたらどうしてくれるんだい。」

この声聞き覚えがあるぞ。

杉村「お前は猪狩。」

猪狩「なんだね。君は。もしかしたら僕のファンかい。ありがたいけどサインはできないよ。」

杉村「いや。お前のサインなんていらないし。というかファンでもない。俺はおまえから打って甲子園に行くんだ。」

猪狩「どこかで見覚えがあると思っただら今日うちの練習見学にきたチームのやつか。ならなおさらあきらめな。君もあの場にいたら分かっただろう。君たちと僕らじゃレベルが違うんだよ。」

杉村「やってみなきゃわからないだろ。」

猪狩「やっただて無駄さ。」

杉村「なら猪狩。今、俺と勝負しろ。」

猪狩「やったって無駄さ。僕は急いであるからこれで。」

杉村「へー。あの猪狩って意外にビビリなんだ。」

猪狩「なに。聞き捨てならないな。そこまで言うなら1打席勝負をしてあげようじゃないか。」

俺と猪狩は河川敷において1打席勝負をすることになった。

猪狩「肩はもうできているからいつでもかまわないよ。」

杉村「こっちもいつでもいいから。」

猪狩「一球目」『ビュッ。パーン』

杉村（はやーい!!打てないよ）

猪狩「どうしたんだい。さっきまでの威勢はどこに行ったんだい。まあいい。二球目行くよ。」「『ビュッ。』」

杉村（さっきより遅い。よし打てる。）『シユシユッ。パーン』

杉村「カーブだど。」

猪狩「三球目。ラストだよ」『ビュッ。』杉村（ストレートか。このえい!）『カツス。パーン』

猪狩「何!」

杉村「くそ!三振か」

猪狩「ふん!だから言ったじゃないか。」（僕の球を1打席でかするとかこいつ。）

杉村「くそ。また勝負だ。」

猪狩「君。名前はなんて言うんだ。」

杉村「杉村亮だ。」

猪狩「杉村か。君の名前は覚えとくよ。今日はこれでさらばするよ。」（次から勝負するときには本気を出さないとな。）

杉村「次こそ勝つからな。覚えとけよ」

こうして俺は猪狩守と出会い、お互いを意識しあうようになった。

高校に入学してひと月がたとうとしている。そのなかで俺は早くも猪狩とあおいちゃんと他校の野球部の奴と出会った。

練習試合

あかつきの練習を見学してからひと月以上が経過した6月のはじまりの日曜日。我がパワフル高校はバス停前高校と練習試合をおこなっている。試合は6回表がちょうど終わったころだ。試合はこちらが高校で1対7とリードをしている。試合の流れはこうだ。まず3回にツーアウトからヒットと四球でツーアウト一、二塁とするとここで3番の尾崎先輩がライトオーバーのタイムリーツーベースで2点を先制する。さらに5回ワンアウトから四球、ヒット、ヒットで満塁になると再び3番の尾崎先輩。ここできっちり犠牲フライを決めて追加点をあげた。相手投手はさらに次の4番打者で死球を出す。と5番の石原キャプテンのところまで真ん中のストレートを投じた。それを見逃さずにフルスイングした結果レフトフェンスをこす満塁ホームランを放って点差は7に。そしてさっきの6回にヒットとエラーで相手が1点をとりかえした。気がつけば6回裏は三者凡退であつさりチェンジだ。すると監督がここでスゴイことを言い出した。

大波「レギュラー陣お疲れ様。予想以上に点差が開いたから一年生を何人か試したいのだが石原どう思うか？」

石原「しかし監督。それは相手に失礼ではないでしょうか。」

大波「スタメンはここまでのゲーム展開で決めたんだがベンチ枠が何人か決まっていらないから誰か一年でいいのがいたら入れようかなと思っっているんだが。」

石原「わかりました。では交代をつけに審判に言いに行くんで誰を出場させるんですか？」

大波「まず投手は吉田。あと尾崎をセカンドにして、ショートに杉村。お前が守れ。あと外野に……」

矢部「おいらでやんすね。」

大波「山本。ライトにいけ。一応これが候補だ。」

矢部（おいらは？泣）

矢部「亮君頑張るでやんすね。」

杉村「うん、ありがとう。俺頑張るよ。」

尾崎「杉村はよ守りにつけ!!?」

杉村「わかりました。今いきます。矢部君も応援よろしくね。」

矢部（亮君羨ましいでやんす。）

試合は終盤の7回。なんと俺は途中出場で試合にでている。監督は来月から始まる夏の予選のベンチ入れ候補だと言っていたからここでアピールできれば一年から大会に出場できるということになるから頑張つてやる。しかし俺は初試合だったためかかなり舞い上がってしまった。（カキーン!）

かわった直後いきなり打球が飛んできた。ちよつと深めだったが追いつける範囲だった。俺は三遊間に転がった打球を捕球したがその後、ランナーの足が早かったため送球を急いでした。結果悪送球になり、それがきつかけでまた点が取られた。

結果、守備ではエラーをしてしまった。打撃で見返そうとしたが打席は回つてこなくそのまま試合は終わった。

スコアは7対3で俺ら一年はいいところが全くなかった。こんなに悔しいのは初めてだった。

今日は試合だけだったため17時前に解散となった。

俺はまっすぐ家に帰った。

杉村「ただいま。」

母「おかえり。今日試合だったんでしよう。勝った?」

杉村「うん。勝ったよ。俺ちよつとバッティングセンターに行つてくる。夕飯までには戻るよ。」

母「気をつけなさいよ。」

俺はそのまま商店街の方に再び歩き出した。

バッティングセンターは学校に行く途中の商店街の東口の方にある。

バッティングの中はほとんど人がいなかった。しかし1人だけ見覚えのある人がいた。緑色の髪でサイドに三つ編みをして野球をしている女の子なんて俺は1人しか知らない。俺はゆっくり彼女に近づいていった。

杉村「あおいちゃん？」

あおい「あれ亮君。久しぶりどうしたの。」

杉村「ちよつと打とうかなと思ったらあおいちゃんがここで投げたから挨拶でもしようかなと思って。」

あおい「そうなんだ。ならもう少しだけまっけてくれるかな。すぐに終わると思うから。」

杉村「うん。別にゆっくりでいいよ。」

彼女は言葉代わりに笑みで返してきた。

彼女はなんとあと2球でパーフェクトだ。持ち玉はあと3球。ここで俺はあることに気がついた。このストラックアウトは持ち玉10球で9マス当てなければならぬかなり難しい方だ。1度しか失投が許されないこのストラックアウトプロでも難しい方だ。さらにこのストラックアウトは1から9の番号がばらばらに並んでいてそれを順番どおりに当てれば豪華な賞品が貰えるらしいが、パーフェクトは見たことあっても順番どおりに当てた人は俺はまだ見たことがない。しかし彼女はここまで7球全て当てている。それも数字の順番どおりに。

彼女はゆつたりとしたフォームだった。そして彼女は地面すれすれからボールを投げた。つまりアンダーローだ。8番のコースはど真ん中だ。みごとに当ててリーチにした。そしてラストは右バッターのインローのコースだ。彼女はもう一度アンダーローからボールを投げた。しかしそのボールは先ほど当てた8番にめがけていた。俺は彼女の失投と思っていたが（シュツ。クツク！）

そこからなんと球は9番の方向に急激に激しすぎた（パーン）

みごとに命中。同じ高校生とは思えない変化だった。

あおいちゃんは得意げな顔をして降りてきた。

あおい「どうだった。僕のシンカーは？」

正直言葉が出なかった。猪狩守といいあおいちゃんといいい本当みんな凄い投手だ。俺はこんな投手から打てるのか心配になっていた。

あおい「えー。亮君大丈夫？」

杉村「あ、うん。凄いシンカーだね。これなら甲子園も夢じゃないよ。部員もこの時期ならきつと集まったよね。」しかし今度はあおいちゃんの方が黙り込んでしまった。

すると後ろから恋恋の男用の制服をきた男がやってきた。

男「あおいちゃん。ごめん。お待たせ。」

あおい「俊太君。遅いよ。」

男の名前は俊太と言うらしい。

俊太「ごめん。ところであおいちゃん。その人は誰？もしかして噂の彼氏笑」

あおい「違うよ。そんなんじゃないよ。彼が杉村亮君。この前言ったでしょ。河川敷で知り合ったパワフル高校の野球部の。」

俊太「あーね。杉村ってこの人ね。俺、谷口俊太。恋恋の野球部のキャプテンね。一応ポジションはショート。よろしく」

杉村「よろしく。俺はパワ高の1年の杉村亮。俺のこと亮でいいよ。ちなみに俺もポジションはショート。」

俊太「そうなんだ。俺も俊太でいいよ。ところであおいちゃんなんの話をしてたの？」

あおい「実はうちの野球部について聞かれたんだけど。」

俊太「あー。確かに答えづらいよな。部員揃えることできねーし。」

杉村「えっなんで。」

俊太「実は男が7人しかいなかったんだよ。今年からということもあつて知名度が低かったから。」

杉村「そうなんだ。」

あおい「ごめんね。僕が言うべきだったのに。」

俊太「あおいちゃん。お互い様だよ。困ったら助け合う約束だろ。そうだ亮。メルアド教えてくれないか。俺ら基本自主練だからたまに一緒に練習しようぜ。」

杉村「いいよ。いつか自主練しようぜ。そうだ。あおいちゃんもアドレス教えてよ。」

あおい「えっ。僕も。」

杉村「いやならいいんだけど。」

あおい「ううん。しよう。」

あおいちゃんはバックからピンク色の携帯を出してアドレスを交換した。

あおい「ありがとうね。亮君。今度メールするね。」

杉村「うん。待ってるよ。俺は今からワンゲーム打つけどあおいちゃんと俊太はこれからどうする?」

あおい「僕たちは今から2人で自主練をする予定だけど亮君も来る?」

俊太「そうだ。亮も来いよ。」

杉村「すまないけど早めに帰らないと飯がなくなるかもしれないからやめとく。また今度誘ってくれ。」

あおい「わかった。ならまたね。亮君。バイバイ」

あおいちゃんと俊太はバッテリーセンターを後にした。俺もあの2人に負けないように頑張らないといけないと思いながらバッテリーングにはげんだ。

この先もうすぐしたら夏の予選がはじまる。我がパワフル高校はどうなるのだろうか。

レギュラー発表

雨が多かった梅雨が明け、いよいよ高校野球のメインの夏の地区予選がはじまる。今日は我が県である山梨県の夏の地区予選大会の抽選日だ。ここ最近の山梨県の優勝校は帝王大付属甲府か山梨防衛そして、あかつき大付属だ。

今年もこの三校に甲子園出場経験のある桜花が優勝候補だ。我がパワフル高校の評価はあまりない。それでも20年前ぐらいに甲子園に出場したこともある高校らしいが最近では3回戦がやつとらしい。

今日が抽選日で来週の土曜日が山梨県の夏の地区予選の開幕だ。

そろそろ抽選会も終わって監督とキャプテンが戻る時間だ。

俺はかなりそわそわしている。なぜなら、今日がレギュラー発表の日でもあるからだ。

大会本部には6月の頭に提出済みなのでレギュラーは前から決まっていたがあえて監督が今日にしたらしい。

そしてキャプテンと監督が5時頃に高校に帰ってきた。

大波「全員集合。来週から始まる夏予選の対戦相手とレギュラーを発表する。まず対戦相手はそよ風高校だ。試合日は2日目の2試合目だ。気を抜くなよ。いいな。」

選手「はい。」

大波「次に前から決まっていたレギュラー陣を発表する。背番号1は金沢。」金沢「はい。」大波「2は石原。」石原「はい。」…大波「6は尾崎。」尾崎「うっす。」…大波「以上がスタメン。次にベンチ組。10は…」杉村（俺は入れたのかな？）大波「17は堺。」堺「はい。」杉村（あと一人）大波「ラスト18は鈴木。以上が今大会のレギュラーだ。レギュラーじゃないものはレギュラー陣のサポートだ。以上」

杉村「やつぱり無理か。」

矢部「そんなに簡単なものではないでやんすよ。秋にベンチ入りできるようになればいいじゃないでやんすか。今は先輩たちを応援してあげようでやんす。」

杉村「そうだね。先輩達のために一生懸命応援しよう。」

その日の帰り道。

テクテク

杉村（やつぱり無理だったか。結局誰一人一年はベンチに入っていないけど悔しいな。）

そんなことを思っていると前から声が聞こえた。

俊太「あれ。亮じゃん。久しぶり。」

杉村「俊太。久しぶり。」

この前あおいちゃんと一緒にいた谷口俊太と偶然再会した。

俊太「そういえば地区予選もうすぐだけどレギュラー入れできたか笑」

杉村「無理だったよ。やつぱり簡単にはなれないと改めて思ったよ。」

俊太「そうか。まあそうだよな。でもお前は秋に再び登録メンバーに入るチャンスがあるじゃん。俺とかあおいちゃんとか来年まで試合出られないんだからそれに比べたらマシじゃん。これからだぞ。」

杉村「そうだね。俊太の言う通り。俺頑張るから。もし秋の大会に出場できたら応援に来いよ。」

俊太「了解。おっと、もうこんな時間だ。呼び止めてごめんな。またな亮。頑張れよ。」

杉村「俊太もな。」

俊太は俺に激励？の言葉をかけて走りきった。

いよいよ夏の大会がはじまる。

一回戦の相手はそよ風高校。一体どんな高校なのか楽しみだ。

夏予選 あかつきの実力

いよいよ山梨県の夏予選が始まった。

俺らは今スタンドで開会式をみている。

矢部「羨ましいでやんすね。」

杉村「そうだね。ベンチ入れしたかったな。」

矢部「まあ。そんな簡単に入れないでやんすよ。また、秋に向けて頑張ろうでやんす。」

そんな会話をしている間に開会式が終わった。

これから2、3年は学校に戻って練習。俺ら1年はこのまま開幕試合を見てプレイを学ぶことになった。

なぜならこの開幕試合はなんといきなり優勝候補同士なのだ。

まず先攻が守りの野球と相手の隙をつく野球が得意山梨防衛と2大会連続優勝を狙うあかつき大付属の試合だ。

昨年の秋から山梨県大会負け知らずだ。それもスタメンがエースでキャプテンの一ノ瀬以外全員が2年というまさに最強であり、創立以来最高のチームと言われている。

試合は6回が終わったがお互い未だに無得点。両投手とも未だに得点圏にランナーを許せていない。それどころか今年のドラフトの目玉の1人である一ノ瀬はランナーを1人も出してない文字通りのパーフェクト中だ。

しかし七回試合が動いた。

七回の表山梨防衛の1番が粘って粘ってフルカウントからの13球目を良くみて初めてランナーを出した。そして続く2番の時に山梨防衛の得意な相手の隙をつく野球をさっそくしてきた。初球からランナーが盗塁をしかけてきた。さらにバッターも打ちに来た。相手は初球からエンドランをしてきたのだが、あかつきの捕手二宮は冷静だった。

なんと真ん中からバッターにくいこむスライダーを投じさせていた。バッターはストリートと違っていたため完全に引っかけた。見事に6―4―3とダブルプレーをとった。

さらに七回の裏。あかつきはここまで散発3安打状態で山梨防衛の堅い守備から点が取れなかったのだが3番の二宮から始まるこの回にあかつきのエンジンがかかった。この日ヒットを放ってる二宮がライト前ヒットを放つと4番三本松、5番七井、6番一ノ瀬の三者連続ホームランで4点を先取した。

勢いは止まらず7番五十嵐、8番九十九、9番六本木、1番八嶋、2番四条の5連打で6対0とし、なおノーアウト満塁で再び二宮。

二宮は初球を見逃さずにバットを振りぬいた。打球はレフトスタンドに吸い込まれていった。

結果10―0であかつきが七回コールドで勝利。おまけにノーヒットノーランつき。

俺らは固まってしまった。こいつらからを倒さないと甲子園に行けないのだがレベルが違いすぎだった。

俺らは歩いてパワフル高校に戻った。先輩たちにこの試合のことを報告した。先輩達もさすがに驚きを隠せていなかった。

夏予選 パワフル高校対そよ風高校

俺らは今球場にいる。今日はパワフル高校の初戦だ。さすがの先輩達もいつも以上に顔が引き締まっている。

大波「レギュラー陣集合。今日はいよいよ待ちに待った夏の大会だ。一つでも負けたら3年は即終了だ。気を引き締めていけよ。いな。」

レギュラー陣『はい!!?!』

大波「レギュラーになれなかったやつもしっかり応援頼むぞ。まだ時間があるからそれまでレギュラー陣は各自でアップしとけ。それ以外はスタンドで他校の試合を観戦すること。以上解散。」

矢部「亮君おいら達も行こうでやんす。」

亮「そうだね。行こうか。」

スタンドに行こうとした時だった。

石原「杉村。少し待ってくれ。」

矢部「亮君、おいら先に行ってるでやんす。」

杉村「わかった。」

そして俺は先輩のところに行った。

杉村「先輩なんですか?」

石原「杉村。キャッチボールの相手をしてくれないか?」

杉村「えっ!!?俺なんとかでいいんですか?」

石原「ああ。お前と1度してみたかったんだよ。だから頼む。」

杉村「わかりました。ちよつと待ってください。グローブを持ってくるんで。」

俺はスタンドに置いてある荷物を取りにいった。

矢部君はもう席についていた。

矢部「石原キャプテンの用事ってなんだったんでやんすか?」

杉村「キャッチボールの相手をしてほしいらしいんだよ。」

矢部「なんで亮君なんでやんすか?」

杉村「俺だって知らないよ。でも頼まれたから俺行くね。」

俺は先輩のところにグローブを持って戻って来た。

石原「よしやろうか。」

杉村「はい。」

俺と石原キャプテンは黙々キャッチボールをした。

しかし途中で石原キャプテンが口を開いた。

石原「杉村。お前は甲子園に行きたいか？」

杉村「それは行きたいです。自分の力で猪狩を倒して行きたいです。」

石原（やつぱりこいつだな。）「杉村。もういいよ。ありがとう。そろそろ球場入りするから。しつかり応援頼むぞ。」

杉村「はい。先輩頑張ってくださいよ。」

石原キャプテンは笑って返事をくれた。

俺は先輩達の準備を手伝ってからスタンドにいった。

本来ならベンチの準備をするのはレギュラーになれなかった2年だけなのだが近くに俺もいたので手伝った。

スタンドに戻るとスタンドはパワフル高校の生徒でたくさんになっていた。

矢部「亮君どうしたでやんすか？遅かったでやんすね。」

杉村「ベンチの準備も手伝ったからね。にしてもすごい人の量だね。」

矢部「そりや今日は休みだからでやんすよ。先輩達に勝ってほしいでやんすね。」

杉村「そうだね。あつもうすぐ試合が始まるね。立とうか」

俺らは両軍の選手がベンチ前に出てきたのがわかったため立ち上がった。そして両軍の選手がホームベースの前に走って整列をした。

我が校パワフル高校は後攻だった。

相手のそよ風高校はそこまで強い高校というわけでもないが変な投手がいるらしくその投手のおかげで秋大はなんとベスト16までいったそうだ。

エースの金沢さんは初回を見事に3人で抑えた。そして1回の裏相手の投手が出てきた。相手の投手の名前は阿畑やすしらしい。見

た目は普通の高校生。変な投手にはあんまり見えなかったがすぐに変な理由がわかった。

それは投球練習が終わったあとだった。

阿畑「ほな、バツクの皆さんよろしゅう頼みまっせ」

なんとバリバリの関西弁だったのだ。しかし彼が変な投手と言われている理由は彼の決め球のことなのだ。

1番、2番を打たせてかるくツーアウトをとった。続く3番の尾崎先輩の時になると彼は山なりのボールを投げた。しかし尾崎先輩はその山なりのボールにかすりもしなかった。

矢部「あれはナツクルでやんす。」

杉村「ナツクルってあの揺れながら落ちる変化球のだよね。」

矢部「そうでやんす。しかもあれだけの落差はプロでもないでやんすよ。」

そう、阿畑は日本屈指のナツクルボーラーなのだ。しかも普通のナツクルより落差があるためこれをアバタボール10号というらしい。

パワフル高校はこのアバタボールを攻略することができなかった。

対するそよ風高校もエースの金沢さんから三塁ベースすら踏ませてもらえないピッチングをされて回は八回まで進んだ。

そして最終回。エースの金沢はスタミナが限界に近づきながらもこの回先頭の7番を三振をとった。そして8番バッターもフルカウトからにしたものも内野フライに打ちとった。しかし9番バッターにライト前ヒットをあげ、さらに1番バッターの時にワイルドピッチでランナーを得点圏に進めてしまった。

だが、金沢さんはここも冷静なピッチングをして1番バッターもキャッチャーフライに打ち取った。

そして9回裏、ランナーが一人でも帰ってきたらサヨナラ勝ちというところまできたが1番から始まるこの回も阿畑のオリジナル変化球であるアバタボールを打つことができずに1番、2番ともに凡退をした。

ここで3番の尾崎先輩だ。尾崎先輩は今日ノーヒットながらも四球を1つ選んでいる。

しかし阿畑は四球を恐れずにアバタボールを連投してきた。しかし尾崎先輩も粘ってフルカウントまでにしたが最後はアバタボールではなく138キロのインハイのストレートだった。尾崎先輩は完全に振り遅れて三振となった。

そして延長戦に突入。

10回の表。相手の攻撃は2番からだった。この2番を四球で出すと3番に送りバントを決められて、ワンアウト二塁のピンチを迎えた。ここで相手の4番田中を迎えた。この田中は今日3安打猛打賞と1番怖いバッターを迎えた。ここは1点勝負のためにもちろん田中は敬遠をした。ワンアウト一二塁で今日ノーヒットの5番。

しかし初球に汗でボールがスベリデッドボールでワンアウトフルベースにしてしまった。バッターは6番の阿畑。

パワフル高校はここで伝令を向かわせた。一つのミスで大量点につながるピンチをどう抑えるかについてだろうと思う。

そして最後にマウンドで『パワ高勝つぞ』という掛け声を石原キャプテンが声をかけて内野に集まっていた内野陣が各ポジションにちらばった。

エースの金沢さんは最後の最後まで味方の援護を信じて投げた。しかしツーストライクワンボールからの4球目だった。阿畑はインコースのボール球を打った。打球は完全にどん詰まりのボテボテのサードゴロだった。サードは素早く打球を処理してホームに送球をした。しかし、送球したボールはなんとキャッチャーの石原キャプテンの横を抜けてしまった。悪送球だったのだ。この悪送球で三塁ランナーだけではなく二塁ランナーまでが生還した。

この後、なんとか後続を打ち取った。

10回裏は4番からの好打順だった。阿畑もさすがに疲れが見えていた。アバタボールの落差がなくなってきたのだ。これを見逃さずに4番、5番が連続ヒットでノーアウト一二塁のチャンスを作ったものも6番、7番と後続が続かずにツーアウト。そして8番の石原

キャプテンの打順。今日は1安打を放っている。

ここでアウトなら先輩たちの夏は終わりだ。

杉村「キャプテンかつとばせー」

矢部「そうでやんす。ここからでやんす。」

俺らは精一杯応援をした。

そしてツーストライクと追い込まれた時だった。阿畑が投じた球はアバタボールだったが変化しなかった。これを石原キャプテンは見逃さずに振り抜いた。打球は外野の間を抜けていった。

二塁ランナーは悠々とホームイン。そして一塁ランナーもホームをめがけて三塁をかけた。しかしボールは中継のショートに返ってきていた。ショートはホームにすかさず返球する。ランナーは回り込んでスライディングをしてきた。相手のキャッチャーもしっかりショートから返球されたボールを捕球して回り込んできたランナーにタッチした。判定は…

先輩の思いで

審判「アウト。スリーアウト。ゲームセット。」

パワフル高校は惜しくも負けてしまったのだ。

審判「2対1でそよ風高校の勝ち。礼」

ウーーーーーー

サイレンな音が頭から離れなかった。先輩たちは泣き崩れていた。

そして。高校のグラウンドに戻ってから。

石原「今日を持って俺ら3年は引退だ。本当にみんなここまでついてきてくれてありがとう。そして、次のキャプテンを尾崎、お前がやってくれないか？」

尾崎「俺ですか？」

石原「ああ。お前にやってほしい。」

堺「お前なら安心だ。」

吉田「尾崎先輩なら最後までついていきます。」

尾崎「お前ら。ふん、そこまで言うなら俺がビシツと鍛えて甲子園に導いてやるよ。」

石原（ひとまず一安心だ。）

こうして、パワフル高校の3年の夏は終わった。これからは新チームとしてどのような試練が待っているのか？そして、高校に入って初めての夏休みはどんな生活が待っているのか楽しみだ。

三年生が引退してから1週間がたったある日の事だった。放課後の練習前の部室で新主将から集合がかかった。

尾崎「全員集合せいや」

チームメイト『オッス!!?』

尾崎「今日から新しい練習メニューを取り入れる。さらに秋大まで練習量も増やすからな。しっかり付いて来いよいいな。」

チームメイト『ハイッ!!?』

矢部「練習量増えるでやんすか？」

尾崎「矢部。お前だけ素振り50本追加な。」

矢部「ヒィー。すみませんでやんす。」

あれから1週間。新チームのキャプテンになった尾崎先輩は初めこそ戸惑いがあったのか少しぎこちなかったが、3日もたつと馴れたのかチーム強化のために監督と放課後に話し合っているとところを見たことがある。

そして今日。打撃練習と守備練習の強化と練習の仕方についての発表だった。

その後、皆、部室を出てグラウンドでウォーミングアップを開始した
イツチ、ニー、イツチ、ニー。

石原「おー。やってるな。」

尾崎「キャプテン。どうしたんですか?」

石原「キャプテンはお前だろ。しっかりやっているようでよかったよ。お前を選んで正解だよ。」

尾崎「石原先輩(泣)俺らで先輩たちがいけなかった甲子園行けるように頑張ります。だから、その時は是非来てくださいよ。ところで今日はどうしたんですか?」

石原「そうだ。杉村を少しかしてくれないか?あいつと話したいからな。」

尾崎「杉村!!?石原先輩が呼んでるぞ。今すぐ来い。」

杉村「俺っすか?」

尾崎「さっさと来い」

杉村「ハツイ!!?」(一体なんだろう?)

俺はそんな事を考えながら石原先輩たちがいるところに行った。

石原「久しぶりだな。杉村。」

杉村「先輩も久しぶりです。用事ってなんですか?」

石原「特にたいした用事は今はないんだ。ただ明日の放課後、練習前に時間をくれないか?練習には間に合うようにするから」

杉村「はい。別に構いませんけど。明日の放課後どこに行けばいいんですか?」

石原「俺のクラスにとりあえず来てくれないか?」

杉村「わかりました。用事はそれを言いに来ただけですか?それな

ら明日の朝でも良かったんじゃない？」

石原「まあ。少し野球部と尾崎の様子も気になったからな。ついでだよ。お前もしっかり練習頑張れよ。」

杉村「はい。ありがとうございます。」

そう言つて、礼をすると石原先輩も「また、明日な」と言つてグラウンドを去つていった。

そして次の日。

石原先輩の教室の前。

石原「杉村きたか。とりあえず付いて来い。」

俺は先輩の後ろをとにかくついていった。

テクテクテク。ピタ。

杉村「先輩。ここつて。」

石原「俺の一番好きな場所だ。」

そう言つて石原先輩はドアも開けた。

そこはパワフル高校のグラウンドはもちろん。この町を一望できる屋上だったのだ。

杉村「先輩。どうして俺をここに連れてきてくれたのですか？」

石原「杉村。俺はお前なら今の野球部を甲子園に導いてくれる気がする。お前はきつとあの猪狩守に勝てる力を持っているのだと俺は信じている。」

杉村「先輩。俺、よく話がわからないんですけど？」

石原「すまない。いきなり話しが飛躍したな。俺はお前に特別な力があるんだと思う。」

杉村「どうしてそう思うのですか？」

石原「それは勘だ。ただ、お前は必ずいい方向に何があつてもチームをきつとチームに良い影響を与えらると思う。お前なら、あの猪狩守にも勝つて甲子園に行ける。」

杉村「先輩……」

石原「そこでこれをお前にあげる。」

杉村「これは!!？バット？」

石原「俺が高校3年間使用した金属バットだ。お前に使つてほし

い。」

杉村「そんな大切なものいただけません。お返しします。」

石原「杉村!!?頼む。お前がこのバットを使って甲子園に連れて行ってくれ。」

杉村「先輩…。わかりました。でも、それは俺一人じゃ無理ですよ。チームが一つになって初めて強くなれると俺はそう思っているのです、これからも野球部、全員の事を応援してくださいよ。」

石原「杉村…。」（やっぱりこいつにたくして良かった。）

杉村「そういうことなので、俺は早速練習しに行つてきます。遅くなったら皆んなにも迷惑かけるので。」

石原「そうだな。お前なら必ず良いチームにしてくれるに違いない。そのために、早く行ってこい。」

杉村「ハイッ!!?。」

石原（俺が連れて行けなかった甲子園にお前なら連れて行けるはずだ。頑張れよ。杉村。）

出合いと喫茶店

副会長「これで1学期終業式を終わります。生徒の皆さんは退場してください。」

ザワザワ

矢部「やっと終わったでやんす。あの白髪校長話が長すぎるでやんす。おいら、今日はヘトヘトでやんす。」

杉村「まあ、今日は久しぶりの練習休みだからゆっくり休めば。」

矢部「そうでやんす。今日は部活が休みでやんす。亮君。早速遊びに行こうでやんす。」

杉村「矢部君。ごめんけど今日は用事があるから、いけないんだよ。」

矢部「そうでやんすか？なら仕方がないでやんすね。また、違う日に行こうでやんす。」

杉村「そうだね。違う日に遊びに行こうか。とりあえず、教室に行こう。」

初めての高校生の夏休みを俺らは迎えるところだ。今日は監督が留守のため練習が休みだ。

この後、俺は今から直行で商店街にある本屋に行かないと行けないのだ。

なぜなら、今日が『幸福なネコ』と言う本の発売日だからだ。俺はこの本の作者のファンなのだ。とても面白いのだが、地味にマイナー作品なのだが、一部の人の間では人気のある本だから、初日は売れ切れになって2、3日入荷待ち。しないと行けない状態になってしまう場合があるから、早めに行くのだ。

LHRが終わると俺は商店街にダッシュでむかった。

2時を過ぎた頃に俺は本屋に着いた。

杉村「『幸福なネコ』はまだあるかな？」

俺はあることを祈りながら店内に進んだ。

杉村「あった。危なかった。ラスト1冊じゃん。よし買おうと。」

メガネの女の子「あー。最後の1冊売れちゃったか。せっかく楽し

みにしてたのに。」

俺は本を買おうとレジに向かっている途中で『幸福なネコ』が置いてあった場所から言葉が聞こえたために足を止めた。

振り返るとそこにはメガネをかけた黒髪の女の子がいた。

俺は彼女のもとに行った。

杉村「これ。譲るよ。」

女の子「えっ」

メガネの女の子はいきなり声をかけられたのか少し驚いていた。

そりゃ誰だって驚くに決まっている。見知らぬ人間からいきなり話しかけられたら俺だってビックリする。

しかしこの時の俺は本を譲るべきだと思った。

杉村「俺はまた違う日に買いに来るからさ。」

女の子「ありがとう。」

杉村「どういたしまして。バイバイ」

俺はそう言って店を出た。

女の子は礼儀正しくお辞儀をしていた。

俺はあの女の子にもう一度会えたらいいなと思いながら帰った。

1週間後

杉村「アチく。かき氷だべたい。」

7月の中旬。山梨県頑張市は最高温度38度ととても暑い。

今日は部活が休みで家でゆっくりしようと思っていたのだが…

杉村「俊太のやろう。こんな暑い日に何の用だよ。人を呼び出して。」

それは今朝のことだった。

ピロリン

朝起きたら、俺の携帯にメールがきていた。

『久しぶり。元気にしていたか？実はお前と一度会ってみたいという奴がいるんだけどさ、今日これから会わないか？どうせ部活休みなんだろう。駅前の広場で待ってるから来いよ。』

といきなり、恋恋高校の友達谷口俊太からメールが届いた。それもこれがあいつから来た、初めてのメールだ。

しかも、集合時間が書いてないからこっちは急いで家を飛びどした。

そして今に至る。俺は駅前の広場で谷口俊太を5分程待っている状態だ。

杉村「あつちから誘つといてなぜいないんだよ。」

そろそろ我慢の限界だと思つた時にちょうどそいつは来た。

俊太「亮。ごめん遅くなつて。待つた？」

杉村「待つた？じゃねーよ。こんな暑い日に人を待たせるなよ。あと、俺に会いたいという奴つて誰だよ？」

俊太「その話は場所を移してから話そう。近くに喫茶店があるからとりあえず行こうぜ。」

杉村「いいけど。何か待たせたぶん奢れよ。」

俊太「はいはい。わかつたよ。とりあえず移動しようぜ。」

駅口から商店街に入つて5分くらいだろうか。ずっと暮らしているながらも俺は商店街のことを知らなかつたみたいだ。

なぜなら、この喫茶店を一度も見たことがなかつたからだ。

一体いつの間に来たのやら？

俊太「着いたよ。」

杉村「この店つて前からあつた？」

俊太「いや、今年の春からだよ。」

どうりで知らないはずだ。高校になってから駅口の方に来てないから知るはずがない。

カラーン

マスター「いらつしやい。なんだ。俊太君か。そちらはお友達？」
喫茶店に入ると渋めのマスターが出迎えてくれた。

俊太「マスター。なんだは無いよ。ところで來未いる？」

マスター「俊太君もか。來未なら今買い出しに行つてもらつてるよ。たぶん、あと五分ほどしたら帰つてくると思うから一杯飲んでく。」

俊太「ならアメリカン2杯ね。俺以外に來未に用事がある人つているん？」

マスター「そこにいる馬鹿のことだよ。」

・・・「マスター。それって俺の事かい？」

奥から男がやってきた。背丈は俺と同じくらいだろうか？

俊太「卓也。来てたのか？今日もまたデートの申し込み？」

卓也？「いや。違うから。今日は親父のお使いだよ。來未が修理を頼んでたみたいだから。それが終わったみたいだから届けに来たわけだよ。ところでそいつは？」

俊太「こいつ？こいつは俺やおいちゃんがよく話していた杉村。」

杉村「杉村亮です。よろしくね。」

岡田「俺は岡田卓也。俊太と同じ恋愛の一年だ。よろしく。」

卓也は意外になじみやすそうな人だ。

マスター「はい。アメリカンね。ところで杉村君は彼らと一緒に野球をしているのかい？」

杉村「はい。パワフル高校の野球部に所属していますけど。」

するとマスターが。

マスター「だよ。君の体つきは素晴らしいよ。どうだい？一緒に鍛えないかい？鍛えることはいいよ。」

岡田「また始まったよ。マスターの長話が。」

俊太「でも、暇なら一緒にしない？一人より効率もいいし。」

杉村「考えてみるよ。」

俊太「ほら、マスター。お客さんきたよ。仕事仕事。」

マスター「おう。あぶない。俊太君ありがとうね。ゆっくりしていつてね。」

それから俺らは野球トークで盛り上がっていると。

カラーン

女の子「ただいま。暑かった。」

女の子が帰ってきた。

マスター「おかえり來未。俊太君達がきてるよ。」

女の子は來未というらしい。マスターの娘さんで俊太達の言ってきた子は彼女に違いないだろ。

來未「いらつしやい。卓也また来たの？」

岡田「違う。今日は親父のお使いだよ。ほれ、お前の。あと、今日も可愛いね。」

卓也はいつたいたいななんだ。もしかして変人？

しかし彼女と俊太は普通にスルーをした。ナニ？もしかして考えた方が負けなの。

そんなことを考えていると來未ちゃんは受け取った袋の中からもを出した。

中からは音楽プレーヤーがでてきた。

岡田「まだ使っていたのか？それ。」

來未「うん。大切なものだからさ。」

岡田「そうか。そうだよな。」

なんか空気が少し重くなった。いつたいたこの音楽プレーヤーに何があるのだろうか。疑問を抱いていると卓也が突然

岡田「よし。來未。デート行こうぜ。」

來未「嫌よ。」

なんだ。こいつ。やつぱり変人だ。

俊太「ところで來未。こいつ見覚えある？」

そう言つて俊太は來未ちゃんに俺の方向に視線をむかせた。

俺と來未は初めて目を合わせた。いや、この顔一度見たことがあるな。

どこでだっけ？

俺は思い出せなかったが彼女は俺のことを見覚えがあったよう目で丸くなつてた。

來未「あれ、もしかして、先週本屋で私に本を譲ってくれた人？」

先週？本屋？あーあの子か。

杉村「あの時の子か。」

來未「先週はありがとうございました。あのあと買えた？」

杉村「うん。違う店で買ったよ。ところで君もあの作家の作品好きなの？」

來未「うん。中八木先生の小説すべて買ってるよ。」

杉村「マジで。借りたいなあ。」

そんな事を言ったら

來未「なら、貸そうか？」

杉村「いいの？」

來未「うん。いいよ。今から持って来るね。」

そう言つて彼女は奥の部屋にいった。

すると俊太が

俊太「久しぶりに見たな。來未があんな風に話すの。」

杉村「えっ。そうなの。」

俊太「ああ。なんとというか、冷静というかクールというか、結構静かめな方だかき。面白い奴だけど。」

杉村「へえ。そうなんだ。」

岡田「そうなんだよ。いつも、デートに誘つてもながされるし。」

ここまできると卓也がすごく感じてしまった。いろんな意味で

そんな事を考えていたら來未が戻ってきた。

手には2冊の本があった。

俊太「ところでお前らつてどんな本読んでんの？」

來未「恋愛小説よ。」

俺が答える前に來未が答えてしまった。

俊太「面白いと？そんなに」

杉村「この作品は面白いよ。恋愛小説にして感動系を読みたいなら間違いなく中八木先生の小説だね。この人の作品はすべて泣ける。最高品ばかり。読まなきゃ損だ。」どうやら少し語りすぎたみたいで

俊太「そこまで語らなくても。」

俊太には若干惹かれたみたいだ。

來未「でも、これ本当に面白いから見てみたら。」

俊太「気が向いたらね。」

すると

マスター「來未。ちょっと手伝つてくれないか？」

奥の部屋からマスターが來未を呼んだ。

來未「ごめんね。お父さんが呼んでるから仕事にいつていいかな？」

杉村「いいよ。遠慮しなくて。俺も帰ろうかなと思っていたし。」
すると俊太も

俊太「そうだな。俺も帰るか。卓也はどうする?」

俊太は立ちながら卓也にきいた?

岡田「俺はもう少しいるよ。マスターコーヒーおかわりね。」

俊太「そうか。わかった。じゃあ、また明日な。練習遅れんなよ。」

卓也「わかってるよ。亮もまたな。」

杉村「ああ、またいつかな。」外はまた一段と暑くなっていた。

來未「ところで、あなたの名前何?」

そういえばお互いの自己紹介全してなかったな。

杉村「俺は杉村君。パワフル高校の1年。」

來未「私は笹川來未。同じ1年生。高校は安藤梅田学園高校よ。よろしく。」

杉村「よろしく。ところで連絡先教えてもらってもいいかな?本を返しに来るときに連絡したいから。」

しれっと連絡先の交換を申し出た。
すると

來未「いいけど、今持ってないから、あとで俊太に杉村君の連絡先聞いとくね。そのあとにメールするよ。」

普通にOKだった。

杉村「わかった。メール無理して今日じゃなくていいから。またね。コーヒーご馳走様。」

來未「わかった。またね。俊太。あなたも。」

俊太「ああ。またな。」

俺らは駅に向かった。

ちようど駅に着いたとき、俊太が尋ねてきた。

俊太「なあ、亮。これからどうする?」

杉村「せっかくだし。借りた本でも読むよ。早く読んでみたいしね。」

俊太「そうか。わかった。俺も帰るか。俺あっちだから、じゃあな。」

杉村「ああ。またね。」

今日もまた、いろんな奴と仲良くなれた。そして來未ともまさかの再会。それも、意外に話があいそうだ。もしかしたらこれって…。さすがに考えすぎか。

新しい夏はまだ始まったばかり。

これからが本番。秋の大会レギュラーに選ばれるため頑張るぞ。

西満涙寺と野球少女

尾崎「オラ。今のとれたぞ。しっかりせんかい。」
モバプロ「すみません。」

矢部「今日の尾崎先輩一段と厳しいでやんす。」

杉村「そうだね。いつも以上にはりきつてるといふかなんとか。」

7月の終わりの方。各地で甲子園の優勝が次から次へと決まっていくなか、パワフル高校では次の選抜予選にむけて練習中だ。

今日も朝から夕方までフルで練習。

午後6時やつと練習が終わった。

大波「よーし。皆集まったか。これから8月の日程を説明する。とくに一年は最初の合宿だからきちんと説明聞けよ。」

矢部「合宿があるんでやんすか。」

大波「そうだ。来週から1週間。休みなしで合宿だ。場所は静岡で行うからな。くれぐれも余計なものを持ってくるなよ。」

へー合宿か。楽しそうだな。俺はそんなことを考えていた。

大波「さらに、合宿先で2試合ほど練習試合するから気をつけとけよ。」

一同「うっす！」

大波「あとは、また盆明けにでも話す。以上解散。」

矢部「合宿なんて楽しそうでやんすね。」

杉村「そうだね。とても楽しみだね。」

尾崎「まあ、楽しいこともあるけどいつもより練習も厳しいからな。バテるなよ。あと、監督は言わなかったが近くが海だから一応水着は持ってこいよ。」

矢部「海があるんですやんすか。ということはビキニのお姉さん達と…」

尾崎「馬鹿。そんな暇はねーよ。しかし、運が良かったら、1人ぐらいは会えるかもな。」

モバA「マジで。」モバB「よっしや〜。」

チームメイトの評価が上がった。笑
マイホーム
ガラツ。

杉村「ただいま。」

親父「おう。おかえり。練習どうだったか。」

杉村「今日もきつかったよ。」

親父「そりやな。高校生ぐらいそんぐらいして当然だろ。だいたい、プロを目指すならまだまだ足りないんだぞ。」

杉村「わかってるよ。」

親父「よし。そうとなったら今から練習だ。」

杉村「今からって、どこで練習すんだよ。河川敷はさすがに暗すぎるよ。」

親父「いいから黙ってついてこい。」

俺は親父にしかじかについていった。

ついた場所はいつもの商店街の交差点だ。直進なら、学校。右に曲がれば商店街。左は確か寺があったような…

そう思いながら親父についていると親父は左に曲がった。

左に曲がって数十メートル進んだところに30段近くの石でできた階段が見えた。

その階段をのぼるとそこには西満涙寺というお寺についた。

寺の前には1人の女の子がいた。

親父「おっ。聖ちゃん。和尚はおるか。」

聖「父なら本家だぞ。」

親父「ありがとう。そうだ、聖ちゃん。今日からこいつもここで自主練させるから。よろしくな。」

杉村「えっ。」

聖「うむ。わかったぞ。」

えっ…。

俺はここで自主練をするのか？

それも、こんな小さな女の子と一緒に。

聖「お前。名前は？」

それもタメ口だし。なんかあまりもあるし。

杉村「俺は杉村 亮。えーと君は？」

聖「私か。私は六道聖だ。これからよろしくお願いする。」

杉村「ああ、こちらこそよろしく。」

聖「それは、そうとお主はどここの学生なのだ。」

杉村「俺はパワフル高校だよ。」

聖「パワプロ高校と言えば山梨県の頑張市の古豪のか。ポジションはどこなのだ？」

杉村「一応、ショートだけど。」

六道「そうか。なら一緒に素振りをしないか？私も高校生のスイングを近くで見たいから。」

杉村「うん。いいよ。」

それから、俺たちは100スイングをした。

彼女も平気に100スイングをこなしていた。

それもあり綺麗なフォームで。

杉村「ねえ。君は野球をしているの？」

聖「うむ。父の知り合いの野球チームに参加されてもらってるぞ。」

杉村「へー。そうなんだ。ポジションは？」

聖「捕手だ。」

杉村「えっ…。マジで。」

聖「なんだ。そんなに驚いて。」

杉村「えっ。いや。だって捕手だろ。危くない？」

聖「そうか？私はそうは思わないのだが。」

親父「亮。そろそろ帰るぞ。聖ちゃんも練習お疲れ。なにかこのバカ息子をみて参考になったか？」

聖「うむ。さすが、高校生だ。無駄のないシャープなスイングだったぞ。」

親父「そうか。良かったな亮。小学生に褒められて。」

杉村「いや。これって喜んでいいの？」

親父「まあ、とりあえず今度から自主練をしたくなったらここですればいいさ。じゃあな聖ちゃん。また、今度な。」

聖「うむ。お休みなのだ。」

その帰り道

杉村「親父。聖ちゃんとはいつから知り合いなの？」

親父「うん。そうだな。一応5年前かの？お前もあつたことあるんだぞ。」

杉村「そうなの。覚えてないや。」

親父「まあ、そうだろうな。大した会話とかしてないしな。ところでどうや、彼女のスイング。」

杉村「小学生、ましては女子のスイングとは思えないほどキレイだったよ。」

親父「そうか。お前も負けられないなあ。とりあえず、次の秋の大会頑張れよ。」

杉村「ああ。頑張るよ。」

これが六道聖との久々の出会いとなった。

新しい自主練場所も見つけたし、いよいよ県外への強化合宿が始まる。

さらなる力をつけて秋にあかつきを猪狩を倒して選抜目指すぞ。

夏合宿①

大波「全員そろったか。」

選手A「矢部がまだ来ていません」

矢部君はまたか・・・

今日は8月1日

パワフル高校野球部伝統の合宿の日である。

パワフル高校は1週間、神楽坂グループが経営している神楽坂スポーツセンター伊豆で合宿を行う。

神楽坂グループは社会人スポーツのトップを争う位置におる。

オーナーである神楽坂光成が現役アスリートにも利用できる最高の設備を施した場所であり、神楽坂が認めたチームしか利用が許されない。

本来なら現弱小校のパワフル高校が来れるようなところでもないがどうやら監督とスポーツセンターの責任者が古くからの友人で特別に年に二度使わせてもらっているらしい。

これも、数十年前の最強時代で現Mr. パワフルズの橋森選手などの活躍があったからだ。

大波「よし、矢部において出発するぞ。運転手さんよろしくお願いします。」

ピー。ガツチャン。

矢部「皆さんおはようございますでやんす。今日のガイドを務めさせていただきます。矢部明子でやんす。よろしくでやん」

尾崎「せーの。」

ポイ。(捨てる)

ドーン。(何かぶつかる音)

ブーーン。(サヨナラ)

矢部「待つてでやんす。おいて行かないでほしいでやんす。」

尾崎「よし、寝るぞ。」

杉村「先輩。いくらなんでもやりすぎでは・・・」

高田「なーに。大丈夫だろ。心配すんな。矢部ならどうにかする

や。」

そういう問題でいいのか・・・
いいんだよね。いいよね。だって

皆「矢部だもんな。」

矢部「ハツクツション!!。誰かがおいらのことを呼んでるでやんす
ね。すぐに行く出やんす。」

バスは高速に乗り5時間くらい走った。

そして

ピー。ピー。

オーライ。オーライ。ハイ、ストップ。

ピー。ガツシヤン。

杉村「着いたー!!!。」

吉田「すげー。海も近いぞ。」

わーわー。

施設の責任者「大波。来たな。」

大波「男前田。今回もありがとうな。」

杉村「なんか見覚えあるな。」

矢部「説明するでやんす」

杉村「矢部君いつの間に。」

というかどうかやってここまで来たのだろうか

矢部「おいらを呼ぶ声が聞こえたから神足をつかってきたでやんす。まさか、呼んでるのが杉村君だったとは思ってもよらなかったでやんす。あの人は神楽坂野球部の監督の男前田洋平監督でやんす。黒獅子重工、猪狩コンツェルンと全国でもトップ3を争う監督でやんす。でも、どうしてここにいるんでやんす?。」

大波「全員集合。2年は知っっているだろうが彼はここの責任者であり、神楽坂野球部の監督、そして俺と橋森と甲子園で一緒に暴れたときの仲間の男前田だ。」

男前田「皆さんよろしく。今年もいつも通りしっかり練習をして、今年こそあかつきを倒して俺らの成し遂げたところまで行っておくれ。部屋はいつもと同じだから2年生が誘導するように。」

2年「はい！」

大波「今日はもう遅いから、軽いランニングを兼ねて施設を確認しとけ。以上」

全員「はい！」

なんか緊張してきたな。どんな施設があるのかな

尾崎「1年。ついてこい。とりえず部屋に荷物を置きに行くぞ。」

1年「はい。」

テクテク。テクテク。

10分後

矢部「まだでやんすか。おいら疲れたでやんす。

尾崎「まだ、あと10分はかかるぞ。ここは陸上選手などが練習で使う場所だ。42キロちゃんとおるんだぜ。」

杉村「うそ。1周42キロってここ相当広いじゃないですか。」

高田「そうだな。ここは種目によって宿の場所が違うからな。迷いでもしたら大変だぞ。さっきバス降りた場所はエントランス兼社員用の宿なんだ。だから、学生とかは別なのさ。あと、これだけじゃない。宿はその種目ごとにちがうから宿の設備も違う。他の宿の設備の利用はできない。練習の邪魔になるからな。だから、移動手段も歩きななんだよ。」

杉村「そうなんです。神楽坂ってやつぱりすごいですね。」

高田先輩からここの設備の説明をしてもらいながら俺らは歩いた。
5分後

尾崎「着いたぞ。ここが俺らの宿だ。」

矢部「スゴいでやんす。大きいでやんす。」

ウィーン

いらっしやいませ。

女将「パワフル高校の皆様ですね。お部屋のご案内をします。どうぞこちらへ。」

テクテク。

杉村「ものすごくきれいだね。」

吉田「でも、静かじゃないか。他の学校は？」

女将「野球部は皆様が最初でございます。今日はあと2校来ます。明日は2校。そして、甲子園が終わり次第来る学校もございます。こちらの3階のAフロアがパワフル高校さんのお部屋のフロアです。1部屋最大5名様です。女性のお方はお部屋が決まっています。男性の皆様はご自由にどうぞ。」

尾崎「もしたら、各自部屋に荷物をおいて30分休憩。その後夕食とミーティングだからな。場所は2階の山の間だからな。間違えるなよ。解散。」

舞「もしたら、また亮君。」

杉村「またね。舞ちゃん。俺はどうしようかな。」

矢部「杉村君。同じ部屋にするでやんす。もう吉田君たちとか誘つてるでやんす。」

杉村「いいよ。どの部屋にする?。」

矢部「もう皆部屋に入っているでやんすよ。こっちでやんす。」

吉田「すげー。絶景じゃん。亮も見ろよ。」

杉村「すげー。あっちの方にグラウンドが見えるね。あそこで練習するのかな?。」

矢部「あそこは試合用でやんすよ。練習用はまた別にあるみたいでやんすよ。」

滝「とりあえず今はゆっくりしよな。練習は明日からなんだから。」

杉村「そうだな。よし、トランプしようぜ。」

俺らは夕食の時間までトランプをして充実に過ごした。

この後にあんな恐ろしいことがあるなんて1年生は誰も知らされていなかった。

2年の部屋

尾崎「あつ。いけねー。忘れてた。」

高田「どうした。尾崎。もしかしてあれを忘れたのか。俺、楽しみにしていたのに。」

尾崎「いや。例の物はあるから。ただ、1年にミーティング後の地獄のこと言っただけ。」

高田「なんだ。ならいいんじゃないね。今のうちにバカンスさせておこ
うぜ。地獄を知る前に移動の疲れを忘れさせてようぜ。それに、こつち
の方が楽しいじゃん。あいつらのリアクションが。」

尾崎「そうだな。よし休むとしますか。」

高田「だな。」

夏合宿②

全員「ごちそうさまでして。」

矢部「ものすごく美味しかったでヤンスね。」

杉村「そうだね。栄養バランスもすっかりしてて良かったよ。」

今は合宿の最中で初日のディナーが終わったところだ。

ディナーはとても豪華かつ栄養バランスが考えられていた。

監督「よし、今から全員トレーニングルームに移動。」

矢部「今からトレーニングとかあるんでやんすか？おいらもう、動けないでやんす。」

尾崎「レギュラーにならなくていいのなら休んでもいいんだぞ。」

矢部「頑張るでやんす…。」

トレーニングルームには我が高校と他に2校いた。

男前田「よし、野球部の皆さんようこそ。今から学校対抗の勝負を始める。今日の種目は1チーム9人のリレーだ。1位は何もなく、それ以外は罰ゲームだ。

各自自分達のコースの前に行け。

10分後に開始だ。それまでにメンバーを決めろ。」

リレーとなれば足の速い9人か。足だけなら矢部くん、尾崎先輩、2年の外野の佐久間先輩は確定だな。

あとは誰だろう。

尾崎「メンバーは既に決めている。1番は不甲斐ない矢部。」

案の定矢部くんか。不甲斐ないとは矢部くんらしいが矢部くんは「もちろんでやんすね。」とか言って調子にのっている。なにか不安だ。

リレーのメンバーは6人まで発表された。

残りは3人

尾崎「7番目は俺で、8番目は杉村。」

そうだよな。俺のはずが・・・ある？

杉村「はっ！オレですか！」

尾崎「うるさいなあ。そうだがなにかあんのか。」

いやいや問題だらけですよ。

杉村「俺より足の速い人ならいくらでもいるじゃないですか。それも佐久間先輩の前で尾崎先輩のあととか責任重大じゃないですか。」

そうだ。俺より足の速いなら他にもいたはずだ。だが

尾崎「確かに普通のトラックや直線ならそうかもしれないが、これはダイヤモンドを一周するベールン形式のリレーなんだよ。だから足が速いかつ周り方が上手い奴を選ぶのが良いんだ。お前は走塁と盗塁に関してはおうちでも上位の方だからなあ。だから8番手は任した。俺の期待裏切るなよ。で、最後は佐久間。お前だ。」

マジか。褒められたことは素直に嬉しいがもし最下位とかだったら…。

それに罰ゲームは嫌だ。絶対負けられない。

しかし結果は…。

男前田「一位流星高校、二位船小屋高校そして最下位がベースを踏み損ねて二位で帰ってきたパワフル高校だ。」

先頭の矢部くんが快足で1位でバトンを2番に渡した。

その後流星高校、そして船小屋高校にも抜かれたがなんとか俺と尾崎先輩で追いつき佐久間先輩が追い越したと思ったが…。

まさかの審判が矢部くんの三塁ベースの踏み損ねを指摘。

よって俺らはめでたく最下位。

男前田「2位の船小屋高校は今使った室内練習場のダイヤモンド3つ全て整備。最下位のパワフル高校は練習用 野球グラウンド全てのスタッフと一緒に整備な。」

2人か3人1組で整備にむかえ。

ちなみに矢部くんだけ。君だけは一人で行きなさい。うちのスタッフがすでに始めているから早く合流するように以上解散。」

なるほどこのグラウンドが綺麗なのは練習後にまたこのスタッフが再び整備してるからか。

でも確かこのグラウンド10面以上あった気が…。

こんなたくさんのグラウンドをどんな風に整備してるのだろう？
でもそれ以前に

尾崎「やーべー。お前は何してるんだよ。一位で帰ってきたと思ったらベースを踏み損ねるとか、ふざけんなよ。」

矢部「ごめんなさいでやんす。」

矢部くんがそもそもベースを踏み損ねなければ室内練習場だけで良かったのに。

まあでもグラウンド整備ぐらいにかなるだろと思っていた俺だがこの後このグラウンド整備がどれだけ大変か俺はまだ知らなかった。

夏合宿③

杉村「き、きつい。」

清掃員A「おい、そこもつと腰を落とさんかい。」

杉村「はい」

ただいまパワフル高校は罰ゲームのグラウンド整備をしている最中だ。

それもただのグラウンド整備ではなく甲子園おなじみの阪神園芸風だ。

ここからも甲子園に何人かグラウンド整備をしているようだ。

だから夏はこうやって高校生に罰ゲームを兼ねて手伝わしている。

今日は3面しか使用してないが明日から2校増え、さらに明後日には今年の夏の甲子園出場校で惜しくも一回戦で負けたチームがやってくるようだ。

そうなるとグラウンド整備は6面になり、後半は試合用グラウンドも2面使うため計8面のグラウンド整備をしなくてはならなくなる。

使用していないグラウンドはスタッフのみで軽く整備と点検をするみたいだ。

清掃員A「よし、高校生は上がっていいぞ。あとは俺らが点検するから先に上がれ。」

杉村「や、やっと終わった。」

滝「杉村ー。早く宿舎に帰って風呂入ろうぜ。」

杉村「うん。そうだね。そうしようか。」

宿舎は冷房が効いてとても涼しかった。

俺らは一旦部屋に戻った。

吉田「お前ら遅かったな。」

滝「ああ。グラウンド整備ひとつでこんなに体力を奪われるとか思いもしなかったぜ。」

吉田「確かに。グラウンドが綺麗な理由も裏でこんな大変な整備をしていけば綺麗になるな。俺らも雑には扱えないな。」

確かにこのグラウンドそれどころか設備全てが綺麗だ。

俺らも学校に帰ったら大事にグラウンドを扱わないとな

杉村「さてとそろそろお風呂に入りに行かない？」

吉田「そうだな。俺はお前らが帰ってくるまで待っていたからな。ところで矢部は？」

滝「さあ。まだやっているんじゃないか？どうせすぐ来るだろう。」

吉田「そうだなあ。行くか。あいつがいるとややこしくなるしな。」
カコーン

5階建ての野球宿舎は1階に大浴場がある。先ほどの室内練習場に行く最中にあるのだ。

ここの温泉は天然温泉の上掛け流しのようだ。それも朝の10時から12時の清掃時間以外はいつでも入って良いらしい。

中風呂、露天風呂、水風呂、サウナまでキッチリある。食事といい、風呂といい合宿のことを忘れそうだ。

カコーン

滝「良い湯だなあー。」

杉村「本当に良い湯だねー。」

俺と滝は露天風呂で満天の夜空を眺めながらゆっくり体を癒していた。

滝「そういえば知ってるか？この露天風呂の柵の向こうは女湯らしいぜ。」

杉村「へー。それで。」

滝「お前なあ。『それで』じゃないだろう。うちのマネージャーや他校のマネージャーの裸が拝めるチャンスなんだぞ。」

杉村「はいはい。確かにそれは事実だし興味がないわけではないけど。見つかったら大変だろ。それにいくら向こうが女子風呂だからと言えどうやって覗くんだよ。俺はしないからね。」

滝「それは今からゆっくり考える。時間もあるしな。」

杉村「はいはい。俺あがるから。」

滝「おう。俺も吉田がサウナから出たら部屋に戻るから。」
ガラッ

杉村「ふー。良い湯だった。牛乳でも買って帰るか。」

ガラッ

栗原「あれ、亮くん？」

杉村「舞ちゃん。」

俺が自販機で牛乳を買おうとしたら丁度女湯から舞ちゃんが出てきた。

髪が濡れてて少しドキッとした。

栗原「すごいね。ここの温泉。私うっかり長風呂しちゃった。私も牛乳買おう。」

舞ちゃんが牛乳を買うために自販機に近づいたときに髪からシャンプーの良い匂いがした。ヤバい。ものすごく良い匂い

栗原「どうしたの亮くん？少し顔赤いよ？のぼせた？」

杉村「なんでもなないよ。舞ちゃん湯冷めしないように気をつけてね。じゃあ、おやすみ。」

栗原「あつ。うん。お休み。」

もう少しで理性が飛びそうになつた。

こんなところで理性が飛んだりしたらヤバいぞ。危なかった。それにしても本当に女の子の風呂上りってあんな感じがするかい。あいつでそんなこと思ったかなとないけどやっぱ家族と他の子だとあんなに違うとは恐ろしいなあ。

合宿もまだ初日。明日から本格的な練習が始まる。

この合宿で俺はさらなる進化をして、秋からレギュラーになれるよ
う頑張るぞ。

夏合宿④

2日目の朝

ジリリリリー。ポチ

杉村「ね、眠い。もう朝か。」

吉田「おはよう。早く着替えろよ。ほら、滝も起きろ。」

滝「わかった、わかったよ。起きればいいんだろ。たく、6時とか早すぎだろ。」

ただ今の時刻朝6時。6時半にロビー前集合の予定なので他の部屋の人も起きてる時間帯だ。

初日は施設の見学と高校別対抗のベースランニングリレーとグラウンド整備だけで終わった。

いよいよ本格的な合宿が始まる

朝6時半

大波「よし、全員揃ったなあ。今日から本格的に練習を始めろ。まず簡単に今日のスケジュールを言うぞ。」

まずはランニングと50メートルダッシュ3本。その後8時から朝食で10時にc面集合だ。食後は集合時間まではとりあえず休憩だ。シャワーを浴びるのも構わない。とりあえず今はこれだけでいいか。あとは10時の集合の時にまた言う。

はい、さっさとランニング行ってこい。」

尾崎「おら。早く行くぞ。しっかり遅れずについてこいよ。」

矢部「ところで高田先輩。いったいどのくらい走るんでやんすか？」

ランニング開始して1キロぐらい走ったところで矢部くんが俺らと一緒に走っていた高田先輩に質問していた。

そういえばどのくらい走るとか誰も言っていなかったよな

高田「うーん。たぶん5キロぐらいだと思う。」

矢部「5キロでやんすか。なら、おいだ早く終わって休んでおくでやんす。先に言ってるでやんす。」

杉村「ちよつと。矢部くん…。」

矢部君はダッシュで先頭まで一気に行った。

高田「あいつあとで倒れても知らねーぞ。5キロと言っても傾斜4度の坂を1キロは登るんだぞ。」

杉村「えっ。1キロも坂道あるんですか？」

高田「うん。相当キツイぞ。まあそれよりキツイ坂なんてここにはいくらでもあるけどな。このコースは自分のペースで1時間くらいかけて戻るのがいいからゆっくりで良いよ。まあ、とりあえずあいつのことは諦めろ。あれが例の坂だ。今からはあんまり話すなよ。」

杉村「えーっ。急すぎじゃないですか。」

目の前に見えたのはものすごく急な斜面だった。これが1キロとかしんどすぎる

確かに話しながらだつたらぶつ倒れるかもしれない。

ここはスピードを少し緩めて自分のペースで登ろう。さもないと途中で倒れそうだ。

黙々600メートルくらい登った時に何かが倒れてる気がしたが何かを確認する暇もない。マジでキツ過ぎる。

そして15分ぐらいかかってようやく登りきった。

あとは来た道に戻るだけだ。

一呼吸置いて再び俺は走った。

帰り道の途中坂を上りよる途中にみたものはまだあつたが誰も気にしておらず俺も見えて見ぬ振りをした。

何か聞き覚えのある声が聞こえた気がしたが

ランニング開始して1時間後ようやくロビーの前に着いた。2年生のほとんどはもう着いていた。他の1年は俺とおなじくらいの時間帯で戻ってきた。

滝「あの坂きつすぎだろ。もう2度と登りたくないぜ。」

尾崎「何言ってるんだ。毎朝のランニングはあのコースだぞ。」

滝「マジか。朝からキツすぎる。そういえばあの坂の途中で誰か倒れてなかったか？」

吉田「俺は気づかなかつたけど、亮は気づいたか？」

杉村「確かに何かあつたけど、あれさ人なの？とこで矢部君はま

だなの?」

滝「さあ、見てないぜ。どこかでサボってるんだろ。どうせすぐに出てくるだろう。それより早くダッシュに参加しようぜ。もう2年始めてるから。」

杉村「そうだね。さっさと終わらせてゆっくり朝食食べながら休もう。」

滝「ハア、ハア。疲れた〜。」

吉田「さすがに朝からあんだけ走ると足にくるな。これから2時間後に練習とかできるのか不安だ。」

杉村「とりあえず朝食食べようよ。まともに食える気がしないけど。」

滝「それわかる。マジで食欲わかねー。」

あれ?あそこにいるのって」

突然滝が指をさした。

そこには飯をガツツリ食べてる1人がいた。

杉村「矢部くん!」

矢部「亮くんたち遅すぎでやんす。おいら暇すぎて先に食べてしまったでやんす。」

吉田「なあ、矢部。お前いつからここにいるの?」

矢部「10分前ぐらいでやんすかね?ランニングの途中でおいら情けないことに倒れてしまって、気がつけば周りは誰もいなくてすぐに追いかけてやんすがここにたどり着いても誰もいなかったから1人で待ってたでやんすがお腹が空いてしまったでやんすよ。」

滝「あれ?もしかして倒れてたのお前だったのか気がつかなかったぜ。」

杉村「ね、矢部くん。10分前にいたということはダッシュはしたの。」

矢部「ダッシュでやんすか?」一応みんなを探したでやんすがいなかったから終わったかと思ってたでやんす。」

杉村「えっ。矢部くん、俺たちみんなロビーの前でしてたんだけど

…。」

吉田「矢部。まさかとは思わないがランニングの時階段使ったか？
帰りに。」

矢部「使ったでやんす。かなり急だったけどみんなに追いつくため
頑張つて降りたでやんす。降りて少し走つたらロビーらしきところ
ついたでやんすが誰もいなかったでやんすよ。」

吉田「矢部。それ裏ロビーだ。」

矢部「そうなんでやんすか。でもラツキーでやんす。ランニングも
ショートカットできたでやんすし、ダツシユもサボれてばれてないと
は儲けものでやんす。」

尾崎「へー。そうか。そしたら食後にダツシユを10本して貰おう
か。逃げんなよ矢部。」

あゝあ。こればかりは…。

矢部「亮くん。助けてほしいでやんす。」

杉村「頑張つて。矢部くん。」

昨日から走つてばかりだがいよいよ朝食後に練習だ。

まだまだ2日目だが頑張るぞ…。

矢部「お願いでやんす。誰か助けてでやんす。」

夏合宿⑤

2日目の夕食

杉村「やべー。食欲わかねー。」

最初の合宿の練習が初めて終わった。

学校の練習でやるものとは全然違う。

フリーバッティングであっても二種類のマシーンを使用して効率よくバッティングも出来たし、バッティング終了後はこの施設のコーチがアドバイスをしてくれるなど、成長はかなりできる気がする。

その分練習量も半端ない。

9時から10時までコーチのもと念入りにストレッチをした。

その後、キャッチボール、遠投、連携プレーを30分以上かけてした。

キャッチボールの後は内、外野別でノック。

12時過ぎくらいに昼飯を含む1時間休憩。

昼食の内容はオニギリと漬け物だ。

午後の練習に影響を受けないようにするためだ。

午後からはマシンを2つ使用しての打撃練習とティーバッティングをした。

たぶん1人で200球近く打っただろう。

3時過ぎからはシートノックをした。

合宿期間中は全てゲーム形式で2チームに分かれて1試合分プレイした。

エラーをしたらその場で守ってるチームはスクワットを10回した。

そして5時過ぎにベースランニングを3周と軽くストレッチをして6時前に練習終了。

そしてジャージに着替えていまに至る。

吉田「食うのも練習なんだから頑張つて食えよ。」

杉村「無茶言うなよ。この後、学校対抗戦のミニートレーニングが

あるんだろう？」

滝「だらしねーな。そんならいでねをはいてたらいつまでもレギュラーになれねーぞ。」

杉村「くっそー。これぐらいすぐ食べてやる。見とけ。」

矢部「おいらも負けないうでやんす。」

吉田「お前ら無茶すんなよ。」

矢部「ウツ。み、水でやん…。」
バタン

滝「あー。言わんこつちや。ほれ、保健室行くぞ。」

杉村「ご、ごちそうさま。もう食べれない。」

吉田「おー。食べたか。やるな。はい、水。」

杉村「ありがとう。」

その後、他のやつもボチボチ食べ終えていた。

そしてあの時間が再び訪れた。

グラウンドには昨日いた2校に加え大漁水産高校とベンチャー高校がいた。

男前田「全員揃ったか。今から学校対抗別のトレーニングをするぞ。下位のチームには罰ゲームがあるから気を引き締めてやるように。それでは今日のトレーニングの内容を発表する。今日は盗塁とクイックだ。1学校から3人の投手が出場だ。その合計タイムを競う。各自準備して10分後に始めるぞ。」

良かったー。今日は投手がメインだから俺の出番はないみたいだな。昨日みたいなプレッシャーはもうごめん。

男前田「あと、捕手と一塁、二遊間、バッター、ランナーも必要だからな。ランナーをさせなかったらプラス1秒だからな。逆に成功したランナーのチームはマイナス1秒な。ランナーは3回走るからなあ。」

なんだか嫌な予感が…。

大波「そしたら、投手の3人だが吉田と羽田と中尾の3人だ。そしてランナーは佐久間。二遊間を尾崎と杉村でいつてみよ。尾崎がシヨートで杉村セカンドな。捕手は木村。ファーストは高田。バッ

ターは緒方だ。お前ら今日は3位ぐらいにはおれよ。」

予感の中してしまった。

もしおれがエラーしてしまうと1秒加算とかやめてよ。

尾崎「オラツ。何びびってんだよ。普通通りにしとけばエラーなんてしねーよ。基本はおれが入るからお前はカバーに入れ。」

杉村「は、はい。」

良かった。カバーならエラーの概念がないから助かった。

男前田「まずは流星高校から行くぞ。ランナーは船小屋高校以外の3校準備しろ。はしる順番は適当に決めろ。」

いよいよ2日目のトレーニングが始まろうとしている。

俺は先輩の足を引っ張ることなく無事に罰ゲームなしで戻ってこれるだろうか？

夏合宿⑥

ここまで3校が終えた。

1位はやっぱり流星高校。合計タイムは11.9秒。盗塁も2本さした。これはプロ並みの成績だ。プロの世界では投手がモーシヨンに入って捕手がとつて二塁に投げるまでに4秒かからない。

そのためランナーは3秒台で1塁から2塁に行かなくてはならない。

もちろん送球のずれやスタートのタイミングで結果は変わるから決して3秒台でなくても可能ではある。

この競争でもそのため合計が12〜13秒ぐらゐで行かなければ厳しい。

ちなみに2位はベンチャー高校で12.8秒と普通ぐらゐ。盗塁は1本さした。

3位は船小屋高校で13.1秒である。同じく1本さした。そして次はいよいよパワフル高校の出番だ。

杉村「緊張するな。」

尾崎「緊張するなよ。とりあえずお前はカバーに集中しとけ。いいな。」

杉村「はい。よろしくお願いします。」

男前田「したら始めるぞ。一番手準備いいか。」

吉田「大丈夫です。」

男前田「よし、好きなタイミングで投げていいぞ。」

モブA「リーリー。ランナーもう一歩いけるよ。」

吉田（ちらっ。）シュツ。パス。

墨審「セーフ。」

モブA「リーリー・・・ゴツ！」

尾崎「走った。」

シュツ。バーン！。シュツ。パーン。

尾崎「アウト。」

墨審「アウト。」

男前田「次、準備は良いか。」

羽田「大丈夫です。」

男前田「よし、いいぞ。」

モブA「リーリー。ゴッ！」

尾崎「走った。」

シュツ。パーン。シュツ。パーン。

尾崎「アウト。」

墨審「セーフ。」

尾崎「さすが流星高校だな。スタートが良すぎる。」

杉村「そうですねー。次は大漁水産ですね。パワー重視みたいでスピードはあんまりないと聞きますけど実際はどうなんですか？」

尾崎「足は確かに遅い。だから杉村。次はお前がベースに入れ。」

杉村「無理ですよ。自信がありません。」

尾崎「普段通りでいいから心配するなあ。行けと言ったら行け。」

杉村「はい。」

男前田「よし、ラスト準備は良いか。」

中尾「大丈夫です。」

男前田「よし、いいぞ。」

モブA「リーリー。ゴッ！」

シュツ。パーン。シュツ!!

木村（やばい。引っかけた!!）

尾崎（ショーバンだ。これはとるのが難しい。）

パッパーン。

杉村「アウト。」

審判「アウト。」

尾崎「オイオイ。マジかよ。」

男前田「パワフル高校のタイムは12.9秒だ。盗塁は2本刺した。最後は大漁水産高校だ。準備しろ。」

吉田「良く捕ったな。あれ、まぐれだろ。」

杉村「ああ。偶然入ったよ。」

矢部「偶然でも凄いでやんす。さすが亮君でやんす。」

杉村「やめてくれよ。てれるな。」

大波「尾崎。杉村のクラブさばき近くで見てどう思った。」

尾崎「偶然かもしれないませんがかなり手馴れてるように思いました。ボールの跳ね方が分かってるかのような。」

大波「だよな。よし、わかった。打撃と守備の方に関してはお前に少し任せる。いいな。」

尾崎「ウイッス。任せてください。」

結果、パワフル高校は2位という順位で終わった。

合宿も2日目が終わった。4日目からは試合も始まる

ここアピールして9月の地方大会でレギュラーになるぞ。

総合順位

1位流星高校	10.9P
2位パワフル高校	11.9P
3位大漁水産高校	13.5P
4位ベンチャー高校	13.8P
5位船小屋高校	14.1P

夏合宿⑦

合宿も今日で3日目

今日も朝からランニングとダッシュをして朝食をたべて10時にいつものようにグラウンドに集合した。

大波「全員そろったな。明日からは他校と試合を行う。この期間は全員試合に出すつもりだ。ポジションとかも普段と違う場所で使うかもしれない。早速だが明日の試合に出場させる予定の選手を発表する。ベンチ入りを含め15名だ。明日の出場予定に選ばれなかった選手は墨審やバットひきなど裏方に回ってもらう。次の試合では交代で試合に出す予定だ。いいな。」

全員「はい！」

矢部「おいらは全試合でエースで4番でやんすね。」

杉村「矢部君は外野でしょ。」

15名だけが出場資格か。明日は現時点のレギュラー候補だから呼ばれないだろうな。なんせ2年生だけで13名、1年も含めれば28名。1年生の中で2名しか選ばれないからな。

大波「それでは、今からベンチ入りのメンバーを発表するぞー。尾崎、高田、佐久間、木村……杉村、吉田以上。今呼ばれたメンバーが明日の出場予定選手だ。この15名が先にバッティング練習やノックを受けるように。午後からはシート打撃をする。明日のメンバーに入っていない選手が守備につくように。以上アップにとりかかれ。」

杉村「俺が呼ばれた。」

滝「良かったな。亮。秋の大会のレギュラーに1歩近づいたんじゃないか。」

吉田「確かに明日のメンバーに選ばれてるのは今年の夏の大会の20名に入ってた先輩は全員呼ばれてるからな。そう思ってもいいんじゃないか。」

滝「そういうお前だってベンチ入りしてるじゃないか。お前らしっかりアピールしろよ。すぐに追い越してやるからな。」

矢部「そうでやんす。地方大会は20人の登録でやんす。まだ5人分空きがあるでやんす。すぐにおいらたちも追いつくでやんす。」

杉村「矢部君。俺も君に負けないよう頑張るよ。」

今日はいつも2年生の後にノックなど受けるのに今日は先輩方よりも先に受けることになった。

午前中の練習内容は大きく変わらぬのにどうも緊張してうまくいかない。

そして午後のシート打撃も普段は最後の方にフリーバッティングのようにサインなんてあんまりだされず自由に打っていたが、今回はしっかりサインが出ていた。夏の大会までは主に基礎練習とサポート程度だった。3年生が引退すると本格的に練習に参加できるようになったが、シートノックとかバッティング程度だったがこうやって実戦形式の練習にしっかり出してもらえるようになって本格的にレギュラー争いをしていると実感した。

そしていつもの学校別対抗戦が終えたあとのミーティングで明日のスタメンが発表された

大波「それなら、今から明日のスタメンを発表するぞー。呼ばれたら返事をするように。1番センター佐久間。」

佐久間「はい。」

・

大波「4番ファースト高田」

高田「はい。」

大波「5番サード尾崎」

全員「えっ。」

尾崎「うっす。」

大波「6番・・・」

尾崎先輩がショートじゃなくてサードだと

皆も似たような反応だ。ここまではレギュラー候補だ。それならショートはいったい誰だ

大波「杉村。杉村。」

杉村「は、はっ。すみません。」

大波「きちんと返事しろよ。明日は8番ショートだからな。」

杉村「はい。分かりました。」

大波「ラストは先発投手の中尾。5インニングの予定だ。リリーフで吉田が3インニングで……。」

おれが明日のスタメンだに選ばれた！やったー！それも今回選ばれてる人たちって明からレギュラー候補。その中にまじって俺が先発メンバーに選ばれた。でも、今日の練習も含めてだけどアピールできた気もしないのに……。

矢部「おめでとうでやんす。おいら応援してるでやんす。」

杉村「ありがとう。でも正直不安だよ。」

滝「なに言ってるんだ。なら俺と変わってもいいんだぜ。」

杉村「それは嫌だ。」

滝「なら頑張れよ。」

杉村「おう！」

矢部「いーなー、杉村君。」

ミーティング後、俺はパウリンを飲みながら空を眺めてた。

正直自分がレギュラー候補に選ばれたのかいまいちわからない。

・・・「なにしてるの？」

杉村「うわっ！びっくりした。舞ちゃん？」

栗原「どうしたの？こんなところで？もしかして緊張で眠れない？」

？

杉村「まあ、そんなところ。舞ちゃんはどうしたの？」

栗原「亮君がここに居るのをたまたま見かけたから、気になってきただけ。」

杉村「正直さ、明日の試合のスタメンに選ばれたことに不安なんだよねー。初めての試合じゃないのに。どうしてだろうね。」

栗原「亮君らしいね。でも先輩方よりも上手い下手を含めてもなんとなく私は亮君がいずれはチームを引っ張るような選手になると思っているよ。」

杉村「えっ。」

栗原「だって一番野球を楽しんでそうだよ。昔とちつとも変らな

い。監督や尾崎先輩もそういう所みて、レギュラー候補にしたと私も思うよ。ここぞというところで亮君ならなんとかしそうだもん。」

杉村「俺ってそんな風にみられてるんだ。」

栗原「少なくとも私はそう思ってるよ。私が野球を好きになった理由も亮君が楽しそうに野球をしているところを見てたからだよ。勝つても負けてもいつも笑ってて楽しそうにしてるところをそばで見えていたからね。亮君は周りの人にも影響与えるように感じてる。私がそうだったから。」

杉村「それ、初めて聞いたよ。」

栗原「だって初めて言ったもん。」

杉村「そしたらなんで今言ったの?」

栗原「亮君が不安そうにしてたからだよ。だから明日の試合もいつも通り楽しみなよ。きっと結果もついてくると思うよ。」

杉村「ありがとう少しは気が楽になったよ。」

栗原「良かった。もし何か不安なことがあったらまた相談してよね。」

杉村「ありがとう。舞ちゃんもなにかあったら相談してよね。」

栗原「わかった。何かあったらラインにでもおくるね。私は部屋に

戻るけど亮くんは?」

杉村「そうだね。いろいろ吹っ切れたし。部屋に戻るか。」

栗原「良かった。元気そうになって。明日は頑張ってるね。お休み。」

杉村「うん。頑張るよ。ありがとうね。それとおやすみ。」

遂に明日から秋の大会のレギュラー争い。

まさかの俺はレギュラー候補。このままアピールし続けることはできるのか。

夏合宿⑧

杉村「あく。緊張するなあ。」

矢部「しつかりするでやんす。たかが練習試合でやんす。」

滝「そうだぞ。こんなところで緊張するな。本番まであとひと月しか無いんだぞ。こんなんじや秋大はベンチ入りもできねーぞ。」

杉村「あー。うるさいなー。2人ともメンタル揺さぶるのやめてくれよ。」

尾崎「おい。杉村アップ始めるぞ。さっさと来い。矢部と滝はノックの準備とかいろいろあるだろうが。」

杉村「じゃあ。行ってくるね。」

滝・矢部「がんばれー」「がんばるでやんす」

・
・
・

大波「今日のメンバー集合！それでは改めてベンチャー高校戦のオーダーを発表する。1番センター佐久間。」

佐久間「はい。」

大波「2番……。」

・
・
・

大波「8番ショート杉村。」

杉村「は、はい。」

大波「9番ピッチャー中尾。以上。次に相手の情報だ。ベンチャー高校は今年の夏の地方大会でベスト16の一步手前で敗退したチームだ。このチームは終盤に強く、ここぞという場面での打撃力がすごいから早い回に1点でも多くとることが重要、投手は特に無駄の四球をださないように。以上。最後にキャプテンから。」

尾崎「必ずこの試合勝つぞ。いくぞパワー高。」

全員「おー！」

審判「両チーム整列。今からベンチャー高校対パワー高の試合を始めます。礼。」

選手「お願いします。」

試合は両軍ともに初回は3人で抑えた。

しかしすぐに試合は動いた。

2回の裏のパワフル高校で先頭の高田先輩、尾崎先輩が連打で出塁。6番バッターがしっかりバントを決め7番バッターが四球でワンアウト満塁の場面で俺の打席だ。

尾崎「おい。杉村！最低でも外野まで飛ばせよ。」

杉村（いきなりワンアウト満塁じゃなくても…。内野ゴロだとゲッツーだからな。あー怖い。直球に絞ろ。）

初球はアウトローのカーブは外れた。二球目はインハイにストレート。カウントはワンボールワンストライク。三球目だった。

杉村（アウトローにストレート。この球は打つ。）

カーン！ギューーン！トーン、トーン！

審判「ファール！」

杉村「くそー。きれたか。」

打球は惜しくもファール。

続く4球目は高めのつり球を見送り、5球目は変化球が大きく外れてフルカウント。

杉村（押し出しは嫌だろうから、次もストレートかな）

読み通り6球目はストレートだったが、低めに外れて押し出し四球。

俺の高校初打点はこんな形で記録された。

さらにパワフル高校はその後犠牲フライでもう1点追加。この回2点を獲得。

回は進んで4回の裏。0―2 ツーアウトランナー1塁で二打席目が回った。

二打席目は初球のストレートを打つもセカンドごろ。

さらに回は進んで7回の裏。1―2 ノーアウトランナー無しで3打席目が回ってきた。

7回の表に吉田が2死から連打で1点を返された直後の攻撃。

杉村（ここは流れを変えるためにも何が何でもでないといけないな）

初球はストレートでストライク。二球目もストライクで簡単に追

い込まれてしまった。

そして3球目。

杉村（狙いは変化球。こい）ビュッ。

杉村（きた！）カキーン！

打球は右中間に飛んだ。記録はツーベース。

杉村「よし！」（何とか出塁したぞ。）

その後送りバントと佐久間先輩のヒットで生還。

その後会は進み8回終わって1―3。

しかし九回だった。

先頭を抑えるも四球、盗塁、ヒットで1死1、3塁のピンチを迎えた。

バッターは5番。今日は1安打1打点のバッターだ。

内野はマウンドに集まっている。

伝令「低めに集めて内野ゴロを狙えだどよ。しつかり頼んだぞ。」

投手「了解。内野も頼んだぞ。」

尾崎「よし、この試合とるぞ。」

今日は攻守ともに問題なしだ。俺は一安心してた。

試合は再開。そして1ボール、2ストライクからの4球目だった。

カーン。ボテボテ。パシッ。

捕手「ボールセカンド。」

打球はボテボテのセカンドごろだった。俺はベースカバーに素早く入った。

シュツ。パシ。シュツ。

そしてすかさず1塁に転送。

パシ。

1塁塁審「アウト。」

杉村（よし。ダブルプレイ成立だ。）

しかし、ゲームセットの合図はかからず代わりに

2塁塁審「セーフ！」

杉村「えっ。なんで。」

2塁塁審「捕球前にベースから足が離れていた。」

そう俺はダブルプレイをとることに意識が行き過ぎてベースから足が離れていたのだ。

そのため、3塁ランナーは生還。2死2塁で一打同点のピンチにしたのだ。

その後次のバッターを四球でだし、長打が出れば逆転のピンチを迎えてしまった。

再び伝令で内野が集まった。

杉村「すみません。俺のせいで。」

高田「気にするな。まだ負けたわけじゃない。」

伝令「そうだ。高田のいう通りだ。意地でもこのバッターで抑えろだよ。流れもムードも完全にあっちのものだ。こういうところで強いのがベンチャー高校らしいからな。しっかり頼むぞ。」

相手高校もこの場面で今日ノーヒットの7番に代打を送った。

そしてその初級。

カーン！ターン！打球は投手の右側に飛んだ。

一か八かで飛ぶしかない。

杉村（とどけ！）パーン！ボテボテ。

杉村（くそ。弾いてしまった。）

二塁塁審「アウト。」

杉村「えっ。」

セカンド「ナイス。ガッツ&トス。」

なんと俺の弾いたボールは運よくセカンドベースに転がったようだ。

そのまんまベースカバーにはいろうとしたセカンドがボールを拾い、確実にベースを踏んだようだ。

主審「整列。2―3でパワフル高校の勝ち。礼。」

選手「ありがとうございます。」

こうしてパワフル高校はなんとか練習試合に勝ったのだ。

夏合宿⑨

合宿4日目での初試合は2―3となんとか勝てた。

攻撃面ではそこそこ貢献したが守備では大きなミスをしてしまった。

それが理由なのか知らないが5日目にあつた2試合で代打の出場1度のみ

それも四球という何とも微妙な結果

チームも0―2と1―1の1敗1分

そして合宿も残り2日となった今日の6日目

俺は第1試合目の大漁水産高校戦でなんとHRを放った。

チームは5―3で負けたが俺は3打数2安打2打点と大活躍。

続く2試合目もスタメンで出場

結果は3打数1安打 1四球 1得点 1盗塁

チームは6―2で勝利を飾った。

結果パワフル高校は2勝2敗1分で練習試合を終えた。

そして6日目の合宿最後の夜俺は一人で海に向かった。

杉村「静かな夜だな。」

・・「そうですね。」

杉村「えっ!？」

・・「すみません。驚かせて。」

杉村「いえ。大丈夫ですけど?あれ、笹川さん?」

來未「はい。そうですね。もしかして杉村さん?どうしてここに?」

杉村「俺は高校の合宿できてるんだけど、笹川さんは?」

來未「奇遇ですね。じつは私たちも野球の合宿で来てるんですよ。」

杉村「そうなんだ。でも安藤梅田学園って静岡県の新設校だよね?」

來未「はい。部員は10人ぐらいですね。この合宿所には今日の昼にいただいたですよね。」

杉村「そうなんだ。俺たちは明日で帰るから対戦はできないね。」

來未「そうですね。甲子園で会えるといいんですけどたぶん私たちは地方大会の1回戦を勝てばとりあえず良しとしてるので。」

杉村「そうだね。新設校だもんね。それでいきなり選抜大会とかできたらビックリだよ。」

來未「そうですね。でもどうせ野球部のマネージャーをしてるなら1度でいいから甲子園にはいつてみたいですね。」

杉村「そうだね。俺たちも甲子園行きたい。」

來未「頑張ってくださいね。地区は違うので山梨の高校では応援しときますね。」

杉村「ありがとう。笹川さんたちも頑張って強くなっていつか甲子園で戦おう。」

來未「クスッ。」

杉村「どうしたの急に笑って?」

來未「いや、俊太と同じこと言ってると思って。やっぱり野球バカはみんな同じこと言うね。」

杉村「や、野球バカ・・・」

來未「ごめんなさい。俊太達も小さい頃から甲子園に行ってプロになるって言ってたからさ。杉村君もそうでしょう?」

杉村「・・・そうだけど。」

來未「やっぱりね。さて、そろそろ宿舎に帰ろうかな。」

杉村「そうだね。一緒に帰ろうよ。」

來未「うん。」

・・・

來未「今日はありがとうね。」

杉村「いいよ。こちらこそありがとうね。合宿頑張ってたね。」

來未「うん。ありがとう。また今度お店おいでね。コーヒー飲みながら中八木先生の話しようね。お休みなさい。」

杉村「うん。わかった。帰ってきたら教えてね。お休み。」

・・・

そして朝

大波「よし、みんな集まれー。今日で合宿は終わりだ。明日は1日

休みだ。ゆつくりと体を休めてくれ。」

矢部「やったでやんす。久しぶりの休みでやんす。」

大波「よしお世話になった人達に挨拶して帰るぞ。」

全員「はい！」

大波「代表してキャプテン。」

尾崎「ういつす。1週間お世話になりました。ありがとうございますしました。」

全員「ありがとうございます！」

男前田「気をつけて帰れよ。秋の大会はせめて関東大会には出れるぐらいがんばれ。」

全員「はい！」

・・・

自宅

杉村「ただいまー。」

・・「兄ちゃんお帰りー。」

・・「亮兄ちゃん帰ってきたんだ。」

杉村「杏と恵、ただいま。」

親父「おつ、帰ってきたか。野球はうまくなったか、野球！」

杉村「まあ。うまくなったと思うよ。」

親父「そうか。まあいいか。よし、今日はご馳走だ。」

杏・恵「やったー。」

今日は久しぶりの家族5人での食事だ。

久しぶりの家でのご飯はとてもおいしかった。

友情タツグと約束

大波「おいおい。どうした？もうギブか？」

杉村「まだいけます。バッチコイ！」

カーン！パシッ！カーン！パシッ！

合宿が終わってから1週間

今日も俺らパワフル高校野球部は練習をした。

大波「よし。杉村休憩していいぞ。」

杉村「ありがとうございます。部室でアンダー着替えてこよう。」

テクテク。カチャ

尾崎「おっ、杉村。休憩か？」

杉村「はい。その間に着替えようかなと思ひまして。先輩は何して
るんですか？」

尾崎「へへへ、道具に俺の信念をペンで書きこんでいるんだ。いつ
どんな時でもあきらめないようにな。」

杉村「へー、凄いですね。えーと。帽子には……『目指せ甲子園』。
あ、バットにも書いてある……『甲子園わが命』。」

尾崎「よしこれでOKだ。」

杉村「グラブにはなんて書いているんですか？」

尾崎「みるか？」

杉村「えーと……『I・LOVE・甲子園』」

尾崎「どーだ、ステキだろっ！」

杉村「そ、そうですね。」

尾崎「甲子園、特に高校野球の甲子園はな。俺にとって小さい頃の
憧れの場所、すなわち聖地なんだ。」

杉村「せ、聖地……」

尾崎「杉村！ともに甲子園を目指し、がんばろう！」

杉村「は、はい。そ、そーだ！俺も帽子の裏に書いておこう！『目
指せ甲子園!!』っど。」

尾崎「よーし、今日も練習ハリキっていくぞー！」

尾崎先輩の甲子園に対する思いはそうぞういじようだ

俺も先輩に負けないぐらいいしきしてみるか

尾崎「そうだ杉村俺が見たところお前はまだまだまだ伸びるぞ。」

杉村「そうですか？正直自信ないんですけど。」

尾崎「自信を持って。そうだ、どうだ、俺と一緒に打撃練習してみないか？」

杉村「いいんですか？」

尾崎「いいに決まってるんだろ。よし決まりだつ俺とお前がこのチームの攻撃の要になるんだ。そして目指すぞ甲子園。」

杉村「は、はいっ。」

ガシっ！二人は熱い握手を交わした。

こうして尾崎先輩との友情タッグが芽生えた。

そして放課後

大波「杉村ちよつといいか？悪いんだが備品が足りなくなつてな明日、買いに行つてくれないか？」

杉村「えー。明日ですか…。明日って休みですよねー。」

大波「だから頼んでるんだよ。明日俺は職員会議に出ないといけなからなー。これでも一応教師だから。頼むよ。」

杉村「仕方ないですねー。いいですよ。どうせ暇ですから。」

大波「そうか。助かった。そしたらこれがメモと備品代な。一応お礼としてこれも受け取れ。明日の昼めし代ということだ。」

杉村「あ、ありがとうございます。」

大波「領収書は備品の分だけでもらつて来いよ。お前の飯代はいらないからな。じゃあよろしく頼んだ。」

杉村「は、はい。」

帰り道

杉村「にしても結構あるなあ。一人でできるかなあ。まあ昼めし代で2000円貰ってるから矢部君あたりにでも協力してもらおうかな」

舞「どうしたの。ブツブツ言ってるけど。」

杉村「舞ちゃん。ビックリしたあ。」

舞「なんかいつも驚かれてるような気がするんだけど。」

杉村「気のせいじゃないかな？」

栗原「まあいいけど。それって部活の備品？なんで亮君が？」

杉村「うん。なんか監督に頼まれてさあ。たぶん結構の量があるからマネージャーに頼みずらかったんじゃないかな？」

栗原「明日買いに行くの？」

杉村「うん。その予定だけど。」

栗原「なら、私も行くよ。どうせ暇だし。」

杉村「えっ、いいの！」

栗原「うん。構わないよ。そしたら明日の11時に駅前でもいいかな？」

杉村「う、うん。わかった。そしたらまた明日。」

栗原「うん。明日ね。バイバイ。」

そして夜

杉村「明日は舞ちゃんど買い出しかー。なんかドキドキしてきたなー。小さい頃は2人で家で遊ぶことはあっても出かけるのは初めてだなー。ただの買い出しなのになんか楽しみだ。寝坊したら元も子もないから早く寝ないと。まだ22時30頃だけど今日はもう寝るか。明日のために。」

こうして俺は眠りについた

デート① 栗原舞編

日曜日の朝

杉村「あー。緊張するなー。ただの部活の買い出しなのに。約束の20分前に着いてしまうとは俺は子供か!？」

今日は野球部のマネージャであり幼馴染みの舞ちゃんと部活の買い出しだ。

ただいまの時間は10時45分

杉村「うー。まだかなあ。まだ10分もあるけどー」

そして

栗原「ごめん、亮君。もう着いてたんだ?待った?」

杉村「全然。ほんの少し前についたばかりだよ。」

栗原「・・・そう?なら良かった。」

杉村「う、うん・・・。」

栗原「・・・。」

杉村(うわー。なんなんだこの間。何か話したほうがいいのか
な・・・。そうだ!)

「今日の服かわいいね。舞ちゃんに似合ってるね。」

栗原「あ、ありがとう。そういってもらえて嬉しい。」

杉村「あー。早速だけど行こうか。日曜だけあつて人多いから。」

栗原「そうね。行きましようか。まずはどの店から?」

杉村「そうだねー。スポーツ用品店に行つて冷却スプレーとボール
かな?店は朝比奈スポーツ店に行つてくれだつて。」

栗原「ここからすぐ近くの店だね。行こうか」

数分後

店長「いらつしやーい。」

杉村「あのすみません。パワフル高校の野球部のものなんです
が・・・。」

店長「あー。大波の生徒?少し待って。奥から荷物とってくるか
ら。」

杉村「わかりました。」

店長「はい。スプレーとボール2ダースにスポドリの粉ね。あと、スコアブックの用紙とプロテインね。」

杉村「ありがとうございます。」

店長の息子「とーちゃん。俺、出かけてくるね。」

店長「まで、悠。ついでにこれを藤咲までよろしく。」

息子「えー。だりー。なら配達料のとして500円追加で。」

店長「どうせ、みどりちゃんの見舞いに行くんだろ。そうだなー。それならついでに新しい注文も受けてこい。」

息子「ちつ。わかったよ。よいつしよ。」

店長「気をつけてな。」

栗原「働き者なんですね。小学生ですか？」

店長「ああ。小6だよ。その頑張小学校の。」

杉村「俺の姉弟と一緒にですね。」

店長「そうか、姉弟に伝えといてくれないか？これからもよろしくって。」

杉村「わかりました。そしたら失礼します。」

ウィーン

栗原「ちようど昼頃の時間帯だけどどうする？」

杉村「実は監督からご飯代貰ってるんだけど良かったら食べに行かない？」

栗原「そうだね。食べに行こうか。どこにしようか？」

杉村「舞ちゃんの好きなどころでいいよ。」

栗原「そしたら私気になる喫茶店があるんだけどそこでいいかな？」

杉村「なら、そこにしようか。場所はどこなのか？」

栗原「商店街の駅口の方なの。『七夕』ていうところなんだけど？」

杉村「名前は記憶にないけど・・・でも、もしかして・・・」

栗原「どうかしたの？」

杉村「いいや何でもないよ。行こうか。」

栗原「うん。いこう。」

カーーン

マスター「いらつしやい。あれ？たしか・・・俊太君の友達の・・・杉村君だっけ？來未なら部活の合宿だよ。」

杉村「お久しぶりです。マスター。いや、今日は純粹にお昼を食べに來ただけです。」

マスター「そう。ゆつくりしていつてね。注文はどうする？」

杉村「そしたら特別ランチセットで。舞ちゃんは？」

栗原「私も特別ランチセットでお願いします。」

マスター「特別ランチセット2つね。」

栗原「亮君ここに來たことあるの？」

杉村「うん。友達に誘われて合宿前にね。」

栗原「そうなんだ。その時はなに頼んだの？」

杉村「そんな時はコーヒーだけだったけどおいしかったよ。ランチセットにもコーヒーついてるみたいだよ。」

栗原「そうなんだ。たのしみー。でもこのデザートも気になるなー。ランチ食べた後追加しちやおうかなー。」

杉村「甘いもの好きなんだね。」

栗原「うん。だって美味しいじゃない。」

俺と舞ちゃんはその後昔話などをしながらのんびりランチを楽しんだ。

ランチは本当においしかった。今度からたまにここに通おうかな。その後は2人で商店街をブラブラしながら学校に行き、監督に荷物を渡して帰った。

栗原「今日ありがとうね。楽しかったよ。」

杉村「うん。こちらこそありがとうね。また明日学校でね。」

栗原「うん。また学校で。あと、もしよかったらまた出かけよう

ね。」

杉村「えっ！いいの。」

栗原「うん。亮君が良ければね。」

杉村「わかった。ありがとう。またね。」

栗原「うん。バイバイ。」

今日は本当に楽しい1日だった。

あと1ヶ月で秋の県大会が始まる。その大会でグループ優勝を果たせば地方大会にでれる。

そこでいい結果出せば春の選抜大会だ。

目指せ甲子園

藤咲バッティングセンター

生徒会書記「これで2学期の始業式を終わります。各クラスに戻ってホームルームをすませてください。いじょうです。」

生徒A「やつと終わった。今日も長かったー。」

生徒B「ホームルームだるいな。」

矢部「杉村君。今日はミーティングだけだから練習終わったら一緒に帰ろうでやんす。」

杉村「いいね、矢部君。そうしようか。」

そして放課後

大波「・・・だからこれからは打撃練習と守備練習を強化する。今日のミーティングは以上。今日はこれで解散。」

部員「ありがとうございます。」

矢部「杉村君。一生に帰ろうでやんす。」

杉村「うん。帰ろうか。」

矢部「どこに行くんでやんすか?」

杉村「そうだね。バッティングセンターなんてどうだい?」

矢部「いいでやんすね。」

バッティングセンター

橙利「いらっしやい。なんだ亮君か。」

矢部「亮君、店長さんと知り合いなんでやんすか?」

杉村「親父の野球仲間さ。藤咲橙利さん。」

橙利「こんにちは。その通り。あいつとは一緒に野球する仲間だよ。ゆっくりしていつてね。」

杉村「はい。おつ。今月の飛距離ランクが乗ってるぞ。どれどれ一ノ瀬というひとの120Mかどんな人だろう。」

矢部「杉村君。とりあえずおいらからやるでやんすね。オリヤーでやんす。」

カキーン!ピュー。

矢部「98Mでやんす。杉村君次どうぞでやんす。」

杉村「よし、記録抜くぞ。エイッ。」

カキーン！ピューー！

矢部「115Mでやんす。記録更新とはいかなかったものの今日は杉村君の勝ちでやんすね。」

杉村「えへへ。やったね。よし帰ろうか。」

矢部「そうでやんすね。あつ。」

杉村「どうしたの矢部君？」

矢部「あそこにかわいい女の子が打ってるでやんす。それも小学生ぐらいでやんす。」

杉村「あ、ホントだ。それも110キロゲージだよ。あそこ。」

矢部「世の中にはすごい小学生もいるもんでやんすね。」

杉村「そうだね。この後どうする？」

矢部「そうでやんすね。町をブラブラするでやんす。」

杉村「よし、行こうか。」

夕方

矢部「そしたら、おいらはもう帰るでやんす。」

杉村「わかった。そしたらまた明日学校でね。」

矢部「分かったでやんす。また明日でやんす。」

杉村「もう一度だけバッテリーセンターによって行こうかな。」
ウイーン

橙利「いらつしやい。おや、今日は2度目だね。」

杉村「ええ。もう少し打って帰ろうかなーって思ってる。」

橙利「そういうことかい。これ特別だよ。」

杉村「はい。ありがとうございます。」

橙利「紗黄。カウンター任せていいか？」

紗黄「いいわよ。」

橙利「よろしく頼むわ。あと亮君にあとで飲み物用意しといてあげて。」

紗黄「もう。お父さんったら。」

杉村「あ、別に僕飲み物いららないんで。少し打ってきますね。」
ビュッ。カキーン。カシャーーン。

杉村「ふー疲れた。」

紗黄「はい。飲み物。」

杉村「えっ。」

紗黄「いいから。いいから。」

杉村「そしたら遠慮なくいただきます。」

紗黄「めしあがれ。」

杉村「あつ。美味しい。」

紗黄「野球頑張ってるみたいだね。」

杉村「ええ。なんとか。紗黄さんも大変ですよ。隣の県の聖タチバナまで通って、その上仕事の手伝いなんて。」

紗黄「ええ。でも電車でたったの15分ぐらいだからいうて通学は楽なほうじゃないかしら。」

杉村「でも、妹たちの世話もしてるんですよ。何年前かお母さんが亡くなってから。」

紗黄「ええ。でも仕方ないことよ。それにもう3年はたってるのだから、今更によくよしたところで意味ないことよ。」

杉村「そういうもんですかね。」

紗黄「そういうものでもあるのよ。」

杉村「そうなんですか。よし、ご馳走様でした。ありがとうございます。ました。」

紗黄「また。いらっしやいね。気を付けて。」

杉村「よし、俺も切り替えて秋の大会に出れるよう頑張るぞ。」